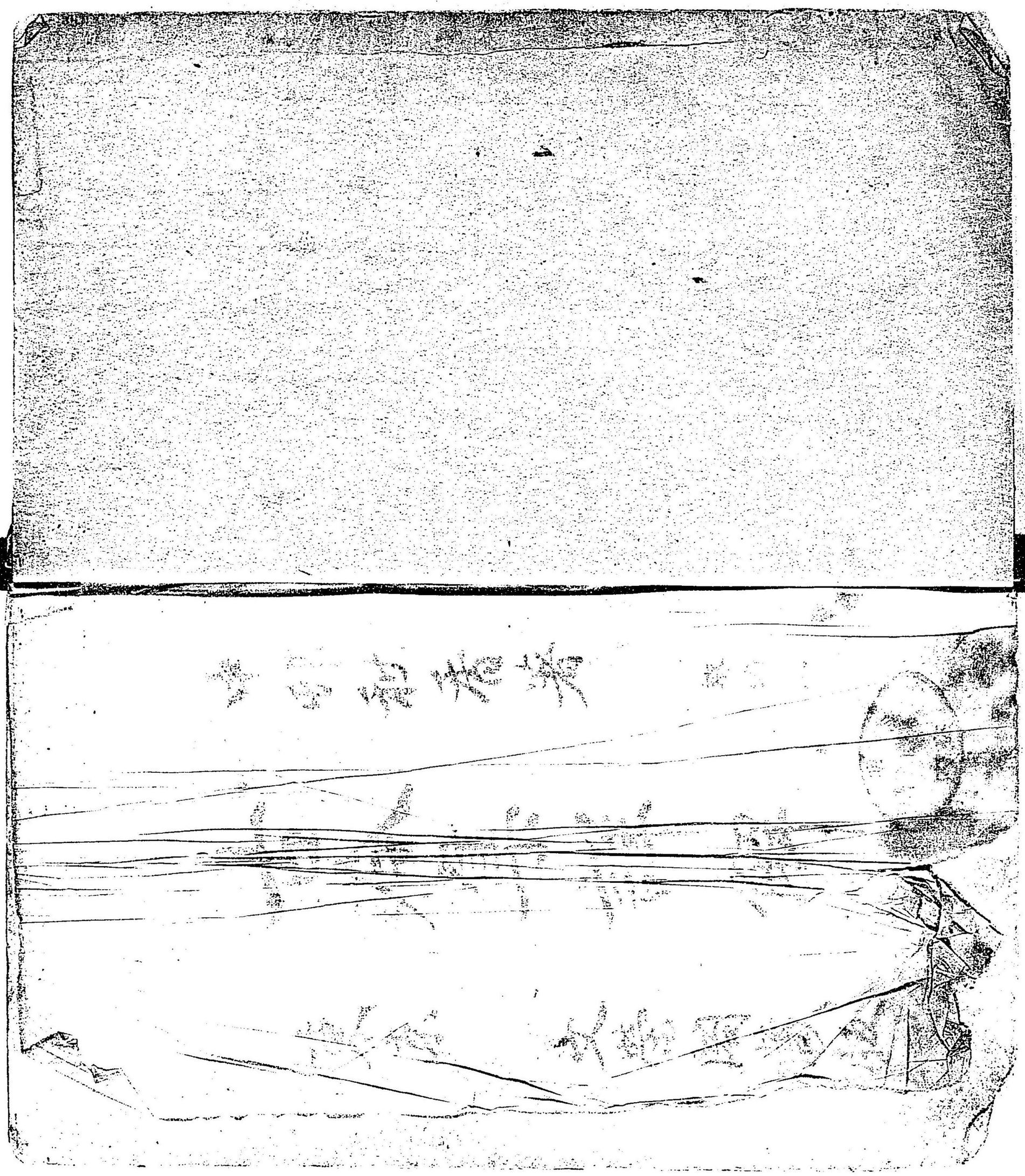
187
322



中邨秋香著

古今集詳解

巻の二

東京

文榮閣藏版

明治
37 6 4
交内

古今集詳解第二

中邨秋香講述
加藤きみ子筆記

古今和歌集卷第三
夏歌

題しらず、　よみ人しらず

我やどの池の藤なみ咲きにけり山郭公いつかきなかむ

この歌はある人のいはく、かきのもとの人まろがなり

山郭公といふを、今では郭公と差別なく用ひる事ぢやが、古くは山の郭公なる郭公といふ意に用ひたもので、此歌なども宿の藤といふに對へていふぢや、と正義にあるがよろしい、○わしの家の庭の池の端の藤の花が咲かあるわい　此花が咲く時分は、いつも山から郭公が出て來て鳴く事であ

（今年はまだ鳴かない）はていつ來てなくであらう」といふので「やまほ
ぎすいつか來なかん」とさらさらいふた調のうちに、おのづとまだ來鳴かい
いつきなくだらうと待ちかねる情が知られるので　こゝが面白いのぢ
偖この、此歌は云々は無論後の人の嘗入れたもので、人丸の歌ならぬは明

ことぢや

紀のとしさだ

うづきにさける櫻をみてよめる、

うづきは卯の花月の略稱で、舊暦四月の異名である、

あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさ
くらむ

あはれはこゝでは賞玩していふこと、即ちあゝ結構ぢや美しいといふ意て
ふは「といふ」の約まりたる詞あまたにやらじとは澤山の花に此褒詞を言はせ
まい、といふこと、即ち獨占にせんとの意ぢや、〇あゝ美しい結構ぢや、と人の褒
めはやす褒詞を　あれこれと多くの花の上に分て言はせず、自分獨占にしや

うとの事でもあらうか　春におくれ、夏と成つて、外の花は皆散つた後自分獨
りさく事でがなあらう」といふので　さくらんといふに、櫻をよみ入れたもの
ぢや

よみ人しらず

だいしらず

さつきまつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふるこゑ

さつきは、舊暦五月の異名で、さは「さなへ」「さをとめ」「さみだれ」の類、五月に多くい
ふ詞といふ事である　時鳥は五月を主として鳴く鳥ぢやから、自然五月の鳥
のやうに古來いひなしてをる故、今も五月まつとはいふのぢや　はぶきは羽
振るで羽たゝきする事ふるとふくと古く通用する事、萬葉に山吹を山振と書
いたでも知られる、〇五月を待つて、まだ山にこもつて居る郭公よ　羽たゝき
して今でもすぐ來つて鳴けよかし　去年鳴きしやうにさやかな聲で」といふ
ので　「こぞのふる聲」は去年鳴きふるした聲といふではない、去年鳴いた通り
の聲といふので、即ち愛すべき聲といふ事ぢや、といふ説がよろしい　さて此
歌からして下二首までは四月中の歌である。

さつきこば鳴きもふりなむ郭公まだしきほどの聲をきかばや

「まだしき」は未しきといふ事で、時節に先だちて珍しいこと、○五月が立た事なら時鳥の鳴く事が多く成つて、鳴きふるすから珍らしげがなくなるであらう此四月の内のまだ至て少く珍らしい内の聲をどうぞ聞きたいものである」といふのである。

さ月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖のかぞする

「さつきまつ」は、橘の花は打任せて五月のものゝやうに言習うてをる事ぢやから、四月中に咲いたをさして、五月待つ花橘」といふのぢや　これを五月をまち得て咲いた花橘といふ意に說くは宜しくない「さ月まつ」の詞はどうしてもさうは聞えない、といふは、前のさ月まつ山郭公とある歌でもしられ　又前のさ月まつより此歌までが四月で、次からが五月で、いつのまにの歌をあげたでも明かである　さて此「五月まつ」といふ期待の詞が、下の句の昔の人云々と相應

ずるので、こゝがおもしろい處である　「花たちばな」は柑類中一種の名、「たちばな」とは「田治間花」のまの省かれたるものぢやといふ、是は垂仁天皇の十九年といふに、田治間守といふ人が、天皇の仰を蒙つて、常世國に渡り、千辛万苦して非時香果を得て歸朝したが、此時は景行天皇元年三月で垂仁天皇崩御の後であつたから、田治間守は深く落膽し　天皇の御陵を拜し、慟哭して死んでしまうた、非時香果は即ち橘で、今いふ柑子密柑ぢや、との事ぢや　是よりして田治間花といふ名を負うたものぢやといふ　偖此「昔の人の袖の香」といふを、舊說に田治間守の事といふを、打聞に之を破つて、只何となく古人の袖の香なりといはれし以來諸先哲もさやうに說かれたが　誰が袖ふれしなどいはゞ格別「昔の人の」とさし定めていふは、仍田治間守を思うて言ふたものぢや、○五月を待て、四月中から咲初た花橘の香を嗅げば、(垂仁に奉らんと期待して持歸つた)昔の人の袖の薫かとサ、思ひまがへられる事ぢや」といふので　「袖の香ぞする」の句中、深く其人をしのぶ情をよせたものぢや

いつのまにさ月きぬらん足引のやまほとゝぎす今ぞ鳴なる

いつの程に五月と成つた事であらう、（さて〳〵月日の立つは早いものぢやと）外ねて待ちかねて居た時鳥が　山から出て今サ、あのやうに鳴く事であるわい、」といふので、「いつのまにさ月きぬらん」といふ口調の下に、おのづと月日の立の速かなるを歎ずるさま含まれ、又「足引の山ほとゝぎす」とのどめて「今ぞ」と強くうけたるかけ合せの上に、平日待ちにまたれたといふ意が、何となく知られるのぢや、

今朝きなきいまだ旅なるほとゝぎす花橘に宿はからなむ

今朝出て來て始めて鳴く時鳥は　まだ旅の儘で宿所も定めぬ事であらう
故にわしが家の花橘に宿を借りるがよい」といふので　さらば親しく常に聲を聞くべければといふを餘情としたのぢや

おとは山をこえける時に、時鳥の鳴くをきゝてよめる、

紀友則

音羽山けさこえくればほとゝぎす梢はるかに今ぞなくなる、

音羽山を今朝早く我等が越えて來れば　時鳥があれあの見える梢の邊で遙に今サあのやうに鳴いてをる事よ」といふので　都ではとてもかうは聞かれぬものを、といふを言外としたのぢや　さて此「今ぞなくなる」の句はかねて音羽山を越ゆるなら必時鳥をきく事ができやうと思ひ設けて居たさまが、語勢でしられる　これらが味ふべき處ぢや

ほとゝぎすのはじめて鳴きけるをきゝてよめる、

そせい

時鳥なくこゑきけばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた

二の句普通本には「初聲」とあれど　素性集　六帖等に「なく聲」とみえ　又端詞に照しても「なく聲」とあつて然るべきぢや、と先哲いづれもの說に從ふのぢや

「ぬし定まらぬ」は誰と指す人があるでなく、誰ともなしにといふこと　はたはこゝでは俗に「やつぱり」といふ程の辭にあたる、○あゝ時鳥の聲が聞えるが此聲を聞く時は、いやにつまらぬ、味氣ない氣もちがして、誰ともなしに戀し

くなつかしく思はれるよ「やつぱりサ」といふのではたはいつと限らず、やつぱりといふ意、例年に對していふものぢや　時鳥の聲は何となくものなつかしく、且うらがなしきやうの感をおこさしめるものぢやから、かくいふたぢや

ならのいそのかみ寺にて、郭公のなくをよめる　　そせい

石の上古きみやこのほとゝぎすこゑばかりこそ昔なりけれ

「いそのかみ」は、ふるといふにかゝる枕詞ぢやが、此歌では其枕詞を、やがて石上寺に活用して兼ねしめたのぢや　ふるき都は奈良の都をいふ平安朝と成つてからは奈良をば古き都といふのぢや。○此石上寺のある古き都、即ち奈良の京は、すべて衰へ變じて昔の姿は頓となくなつた事ぢやが、只時鳥の鳴く聲ばかりはサ、昔の儘である事であるわい、」といふので　「聲ばかりこそ」と強くいつた言外に、其外は萬事萬物皆悉く變り果たが、といふ情が明かに知られるぢや、こゝが妙とする處ぢや

題しらず、　　よみ人しらず

夏やまになくほとゝぎす心あらば物おもふ我に聲なきかせそ、

夏山に鳴く時鳥の聲を聞くときは　殊更悲しく成つて、どうも堪へられないされば時鳥よ　汝も生物故心あるであらう、心あるならば　かやうに物思が有つて、常に憂ひ悲しんで居る我等には、聲を聞かせる事をするな」といふのでこれも時鳥の聲を聞く時は、何となくうら悲しく、物なつかしいやうな感をひきおこすものぢやからの事で　次の歌なども同じである

ほとゝぎす鳴こゑさけば別れにし故郷さへぞ戀しかりける

時鳥が鳴く聲を聞く時は　いろ〳〵いひ盡されぬ感情が起つて來て　曾て別れ來たつた故郷までがサ戀しくなつかしくなつて來る事であるわい、」といふので　「故郷さへぞ」のさへの辭を味はゞ、いろ〳〵の感情を生ずるといふ事はおのづとしられるであらう。

郭公ながなく里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから

ながなく」は汝が鳴くといふこと「おもふものから」は思ふものながらといふ事、此ものからといふに二つの別がある、ものながらの意と　ものよりの意とぢや　委しくは皇國文法釋義に申しておいた、○あゝ時鳥よ　汝は甚愛すべき鳥ぢやが　只汝は我處ばかりでなく　あちらにもこちらにも所々方々に澤山鳴いてあるく事であるから　猶やはり疎々しく思はれる　愛すべき鳥とは思ふものながら、といふので　猶といひ思ふものからといふ、言外に愛すべき鳥ではあれどゝいふ意がおのづから去られるぢや

思ひ出づるときはの山の郭公からくれなゐのふりでゝぞ鳴く

此歌は戀歌である由遠鏡にいはれたが宜しい　時鳥によせて戀の情をのべたものぢや　常磐山は山城にもあれど、常磐木山をもいふ、こゝは常磐木山をいふぢや　「からくれなゐのはふりでといふにかゝる枕詞、絹を紅に染めるには紅の汁に入れてよくもみよくふり出すものなればぢや、「ふりでてなく」はふりはへてなく事で、一向に鳴くこと、○わが戀慕ふ人を思ひ出す時は　緑にしげる常磐木山の時鳥の如く　から紅のふりでふりはへて、一向になくよ

り外の事はない」といふので、常磐山といふにおのづと緑の色の意があつて、枕詞のからくれなゐといふに匂ひあふたがおもしろいのぢや

聲はしてなみだは見えぬ郭公わが衣手のひづをからなむ

聲はすれど　涙は一向に見えない時鳥よ　其鳴く聲をきけば我は悲しく成つて、涙で袖が濡ぢぬるゝ事であるが　これを汝は借りたがよい、といふのでさうしたなら聲と涙が相應じてよからん、といふを言外にしたのぢや

足引の山ほとゝぎすをりはへて誰かまさると音をのみぞなく

「足引の」は例の枕詞、「をりはへて」のをりは折返しの折と同じで、繰返す事　はへは、うちはへ「ひきはへ」のはへで延ぢや　「をりはへて」は繰返し打しきること、○緑に茂る夏山のこゝかしこに　繰返し打しきりて鳴く時鳥のさまは　負けじ劣らし、誰がまさるかと競爭してなく事よ、といふのぢや　これをわが物思に泣く事とくらぶる意に說くはよろしくない

今さらに山へ歸るな郭公こゝのかぎりはわがやどになけ

時鳥は五月專らに鳴いて、六月に入れば鳴きやむものぢやから　其鳴きやむ

を山へ歸る事にいひなして、よんだものぢや○かく里なれた上は、今更ふたゝび山へ歸るやうな事はするな　時鳥よ　いつまでも里に在て、聲のつゞく丈は　わしのうちでなくがよい

みくにのまち

やよやまて山郭公ことづてむ我世の中に住みわびぬとよ

「やよや」は呼びかける聲で、今もし〳〵といふ程の辭、○もしもしマア、待てくれ　時鳥よ　山へ歸るなら言傳がある　わしは一モウ此世の中に住みあぐんで、どうもしかたがなくなつたといふことをよといふので　それ故近々山へ引きこもらうと思ふといふを言外としたのぢや　これは山中に世を避けた法師などのしりあひの人を思うていふたのぢや

紀友則

寛平の御時、きさいの宮のうた合のうた、

さみだれに物思ひをれば郭公夜ぶかく鳴きていづちゆくらむ

梅雨のふる夜の物淋しさに　色々と物を考へ續けて、眠りもやらんで居る折柄、時鳥が鳴いて行くが　ア、此深夜の雨さへふるに、何方へ何のために行く事ならん」といふのぢや

夜やくらき道やまどへる郭公わがやどをしも過ぎがてになく

夜が眞暗であるから、行きわづらうての事故か　又は道に迷うてせん方がない故でか　時鳥よ　處も廣いのに、わしが家にサ、マア、過ぎがたげに、こゝにばかり鳴いて居る事よ」といふので　しもの辭に目を注いでみれば、一首の趣味がおのづからわかるぢや

やどりせし花橘もかれなくになど郭公聲たえぬらむ

大江千里

橘を時鳥の宿といひ習はすは　梅に鶯　萩に鹿の類で　其時節のものを以て、取合せたまでの事ぢや　さて此歌は時節の末に成つて聲の絶えたをいふではない鳴くべき時節にたま〳〵鳴かぬから、よんだものぢや、○宿所とした花橘が枯れたといふでもないのに　此頃時鳥の聲がせぬは　はて何故の事

であらうといふのでさて〳〵あやしい事よ、といふを言外にしたのぢや

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれば郭公鳴くひと聲にあくるしののめ

初句「夏の夜は」と題本にあるが宜しいと正義にいはれたが、ばとあれば、殊によく聞えるが、のでも聞えない事はない「しのゝめ」はもとあくるにかゝる枕詞ぢやが それをやがて明がたの名にも用ふる事で 久方を打任せて空の事にいひ 玉垂を小簾にいふと同例ぢや、○夏の夜はさても〳〵短い事ぢや今、たつた今寢たかと思ふに 時鳥がなく一聲に目がさめてみれば 東の空が、はやほの〴〵と明けかゝるしの、目の空となつた

くる〳〵かと見れば明けぬる夏のよをあかずとやなく山郭公

四の句のあかずは、他かずに、明かずを兼ねていふたぢや 明くは古くは明か、明き、明く、明けと四段に活かしていうたものぢや、○日が暮れたかと思へば

すぐにはや明けてしまう此夏の短夜を 飽かず殘りをしく思うてか、まだ明けずと思うてか あれあのやうに山の方で時鳥がなく事よ

紀秋岑

夏山に戀しき人や入りにけむ聲ふりたて、鳴く郭公

此時代は、佛道が盛に行はれて、誰かれとなく老年になれば出家入道する事で其中でも志の厚い人は山に入つて世を遁れるが、先づは一般の風習で有つた 此歌はそれに依つてよんだものである 戀しき人といふを、戀の意として、設くは誤ぢや 只平常親しく交はる人といふ意にみるべきである、○夏の山中に 親しく懇意にせし人が入つた故でもあらうか あれあのやうに聲をふりあげて 慕はしさうに時鳥がなく事よ」

にぶのたゞみね

だいしらず、

こぞの夏鳴きふるしてし郭公それかあらぬか聲のかはらぬ

よみ人しらず

「鳴ふるし」は前の「こぞのふる聲」のふると同じで、ふるけた事ではない、鳴きなら

ひ、聞なれたといふ意ぢや、○去年の夏中、常に來て、日々鳴き習うた時鳥が有つたが　其鳥であるかないか　何しろ聲が能く似てかはらぬ事よ」「聲のかはらぬ」の末に事かなといふ歎息の意が含まつてをるのぢや

ほとゝぎすのなくをきゝてよめる、　貫之

五月雨の空もとゞろに郭公何をうしとか夜たゞ鳴らむ

「とゞろ」はとよみかしましきこと、時鳥の類りになくをいふ「夜たゞ」のたゞは一向ひたすらの意で、夜たゞは夜通しぢや○梅雨の降りしきる空に　とよみかしましきまで頻りになく時鳥よ　何事がうしつらしとて、左樣に夜通しかしがましく鳴く事であらう、さて〳〵わからぬ事よ

さぶらひにてをのこどもの酒たうべにけるに、めしてほとゝぎすまつ歌よめとありければ、よめる。　みつね

「さぶらひ」は詰所で、即はち禁中の詰所ぢや　をのこども云々は同僚の人々酒をのみて居た時に召されたのぢや　さて時鳥待つ歌よめと仰事あるは、今夜月などありて興ある夜のさまで有たからの事であらう。

時鳥こゑも聞えず山彦は外になくねをこたへやはせぬ

「山彦」は、今こだまといふもので、音聲がひゞいて反應する聲をいふ、○今夜は必時鳥がなくだらうと思うたに、一向聲も聞えぬ事よ　あの向ふにみえる山の山彦よ　汝は外に鳴く聲をひゞかせはせぬか、ひゞかすではないか　さらば時鳥がよしやこゝに鳴かずとも　外になく聲を取次いで聞かすがよいではないか」といふので　さやうにして御慰め申しあぐるがよい、といふを言外としたのぢや

山に郭公の鳴きけるを聞てよめる、　つらゆき

郭公人まつやまに鳴くなれば我うちつけに戀まさりけり

松山は陸奥の地名にもあるが、こゝは只松の生べて居る山をいふとの說ぢや　さて時鳥の聲は、何となく人戀しく物なつかしげに聞える物ぢやから、やがて人まつといひかけたのである　「うちつけ」は突然で、さしあたり、たちまちの

意ぢや、○時鳥が人を待つらしい聲で　あの松山になく聲がするからに　何とも思はざつた我らも、突然に人が戀しい情がおこつて來たわい、」

はやくすみけるところにて、ほと〳〵ぎすの鳴きけるを聞きてよめる、　　忠岑

男が女の家に通うてくらす事を、この時代は住むといふた事ぢや　これも昔通ひ住んだ女の家で、時鳥を聞いてよんだのぢや　只昔住居したといふではない　此詞書を古來只昔住居した所と解するから歌をもとき誤つた事である、

むかしへや今もこひしき郭公ふるさとにしも鳴きて來つらむ

「むかしへ」のへは、方で、方は「仕にし方」「行く方」「目方」「尻方」のへぢや、清みてよむ濁るはわろい、○一緒に暮した昔の時分が　今日までも猶戀しい事であるが　あの時公よ　それ故にかやうな故郷の別に用もない所にサマア、此やうに鳴いて來たであらう」といふので　今もといひ、にしもといふに目を注ぐべきぢや

今もは中絶えし今日までもぢや、にしもはわざ〳〵といふ意　いづれも時鳥によりて、わが情をよせたものぢや　これを只昔住居した家とのみみるからして、今もの詞が說き得られず、なれもとありたいなどいふ說もおこるぢや、

郭公のなきけるを聞きてよめる、　　みつね

ほと〳〵ぎす我とはなしに卯の花のうき世の中をなきわたるらむ

我は常に世の思ふ儘ならぬを歎き悲しんで居る事ぢやが　あの時鳥よ　我といふでもないに　卯の花の、うき此世の中に何故さやうに泣渡る事であらう、といふので　やはり我と同じく歎かしい事がある故か、といふを言外としたのぢや　「卯の花の」は、うきといふ詞を起さん爲に、時節の詞を用ひたまでゝある、

はちすの露をみてよめる、　　僧正へんぜう

蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かはつゆを玉とあざむく

此歌は法華經涌出品に、不染世間法、如蓮花在水、とあるに依てよんだものぢやといふ　あざむくは、すかしだまかすこと、○蓮葉は汙泥に染み汚るゝことなく　至て清淨潔白なものぢやが　左樣に潔白な心でありながら　何故に葉におく露を珠とみせて、人を欺きだまかす事であらう」といふので　潔白な心ならだまかすといふことはなかるべきに　さてさて聞えぬ事ぢやといふを言外としたのぢや。

月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる、

源　養　父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

詞書の通り、月の影の清く涼しい晩に、友達など〻語つて明方に至つた時、よんだものので　「まだ宵ながらはまだ宵と思ふ程にといふではない　まだ宵の程であるのにと慥に定めていふので　其極めて短いさまをいひあらはす詞ぢや、○夏の夜はさて〳〵短い事である　まだ是宵であるのに　あれモウ東が

法らんで明けてゆくを　是では月も中天で宿をとらねばなるまい　マア、雲のどこへ宿を定めるだらう」といふので　雲のいづこは、必雲をさしていふではない　空のいづことい程にみる詞である。

となりより、とこ夏の花をこひにおこせたりければ、をしみて此うたをよみてつかはしける　　みつね

「とこなつ」は撫子の事ぢや、夏から秋の末まで咲くものぢやから、常夏の義とこは常磐の常ぢや。

塵をだにするゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我がぬる床夏の花

とこなつのとこを、床にかけてよんだもので、床は夫婦相共に臥すもので、夫婦睦ましく、常に相臥すれば、床に塵のおく事がない　塵をするゑじは塵埃をたからせぬことぢや、○鳥渡した塵埃でさへたからせまいとサ思うて居る事であり升わい　咲き初めた時から　家内とわしと一所に寐る　此床夏の花には、」といふので　「ちりをだにするゑじとぞ思ふ」の句で、況んや何として折り取るな

どの事を、思ひよるべき、決して出來ぬ事ぢや、といふを言外に示し　又「妹と我がぬる云々」の二句で、かく大切のものであるから、といふを去らせて、言外に嚴しく乞を拒んだが、おもしろいのぢや　さてかやうにからかつては言ふたが、其實は乞に應じた事でもあらう。

みな月のつごもりの日によめる、

夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへすゞしき風やふくらむ

今夜暮れて行く夏と　又立て來る秋とが　互に行きちがふ空中の通ひ道は、（夏のゆく方の道は暑からうが、秋の來る方の）一方は定めて涼しい風が吹く事であらう、といふので「かたへ涼しき」の一句で　夏の行く一方はあつかるべけれど、といふ意を知らせたが、面白いのぢや　どうも躬恒は上手なものである

古今集詳解夏卷之三　終

秋歌上

藤原敏行朝臣

秋たつ日よめる、

秋たつ日は立秋の日で、大暑後に來る節ぢや、此時より七月の節となるのである

秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる、

「秋きぬと」の、ぬは畢のぬで、秋が來たといふこと　「おどろかれぬる」とは、びつくりするといふではない、人に問はるゝ事を人におどろかさるといふ類で、それに氣づいて心の動くまでの事をいふのぢや、○秋が今日來たといふ事は　目には見えないけれど　吹く風のおとにサ何となく秋と氣がついて、心の動かれる事ぢやわい、といふので　此風の音といふを、草木をしをり、板戸など鳴すとやうに重く見るはよくない、これはおどろかるといい

ふを見ちがへたからの説ぢや　立秋の時の風は、左樣にはげしく吹くもので
はない、といふに注意すべきぢや、唯何となくそよ〳〵と吹たつまでの風に、お
のづと氣がつき、心の動かるゝといふのぢや

二四

秋たつ日、うへのをのこども加茂の河原にかはせうえうしけ
る、ともにまかりてよめる、　つらゆき

「うへのをのこども」は殿上人をいふ　「川逍遙」は川邊にてあそぶこと　ともに
まかりては、もろともに行きて遊ぶをいふのぢや

河風のすゞしくもあるかうちよする浪と〳〵もにや秋はたつら
ん

「あるか」のかは哉と歎ずる辭で、問かけのかではない、○さてさて河風がいかに
も涼しく吹きくる事でもあるかナア　此河に打よせてくる浪と一緒に　秋
も立つ事であらう」

だいしらず　よみ人しらず

我せこが衣のすそを吹かへしうらめづらしきあきのはつ風

「せこ」は兄子で、女から男を指していふ稱　男から女を指して、妹　我妹子とい
ふと同じである　「うらめづらし」のうらは「うら悲し」「うら淋し」「うら安し」
「うら病し」などのうらで心の意ぢや　それを裏表の裏にかけ、さて秋風で衣
が吹返されて、裏の見えるを裏めづらしといふたのぢや　○こちの内の人の
着物の裾を、あれ〳〵あのやうに吹返して　久々でうらめづらしく　又衣の
裏も吹かれてみえるは、珍しい秋の初風ではあるよ」といふので、うらめづらし
きは心珍しと裏珍しとをかねていふのぢや　夏衣は單ぢやが、單衣が風のた
めに裏を返さるるが珍しいぢや

昨日こそさなへとりしかいつのまに稲葉そよぎて秋かぜのふ
く

「とりしか」は取りし哉の意で歎ずる辭、しかと濁るではない　○「遠い前方の事
ぢやない」只つひ昨日こそ、早苗を取て植付をしたばかりぢやとおもはれるに

マア　いつの程に　あれあのやうに稲葉がそよ〳〵と片よつて　秋風が吹く事であらう、といふので　さて〳〵月日の立つは早いものぢや、といふを言外にしたので　「昨日こそ早苗とりしか」といふ調の上に、遠いことではない、といふ情がおのづと表られ　調がやすらかで實に感の深い歌ぢや　歌はどうぞかうよみたいものである

秋風の吹きにし日より久かたのあまのかはらにたゝぬ日はなし

此歌から以下十一首は七夕を詠だ者である　依て先七夕の事を大略お話し申さう　元此七夕といふ事は、支那から移つて來た俗習で、齊諧記に、天河東有織女、乃天帝之子、機梭勞役容不暇理、天帝憐其獨居、將嫁與河西牽牛夫、婚嫁後竟廢女工、天帝怒責令歸河東、惟一年一會、と有て、星の名に牽牛織女といふ事が詩經にあるから、これに附會てかやうな話が出來たものとみえる　偖七月七日は即ち其の一年一會の夜で、牽牛が天河の西から鵲橋を渡つて、河東に行きて、織女に逢ふ由言ならし　此夜織女を祭れば、裁縫等の女巧に達する由をいうて、乞巧奠といふ七夕祭も行はれ、朝庭の御式にさへ入つた事である　又棚機といふは神代紀にみえてをる名稱ぢやが、それを此織女の名とし、此織女は七月七日の夕牽牛に逢ふものぢやに依て、七夕といふ字をやがてたなばたとよませる事とも成つたのぢや　かやうな事故我が古代より歌にも盛に此事を詠み來つた事で、萬葉にも其歌がみえてをる　偖今此歌に織女が彦星、即ち牽牛を待つ情を自身たゝちに織女の心と成てのべたものである　「久方の」はあまといふにかゝる枕詞ぢや、○秋風がそよ〳〵と吹き初めた日からして、(わしが待つ日はいよ〳〵近づいたとて)毎日々々、天の河原の岸に出かけて、立ちつゝ待ち望まぬ日とてはない、といふで　「久かたの」と枕詞をおいてのどめた調に、おのづから、わがまつ時の近づきたりといふやうな情がひゞくのぢや

久方の天の河原のわたし守君わたりなばかぢかくしてよ

此歌も前と同じで、織女の心となつてよんだものといふ説もあるが、それでも聞えるが　又それまでゝもなく、織女に同情を寄せてよんだとしてもよろしい、○あの天の川の渡舟を取扱ふ渡守よ　今夜牽牛星の君が渡つてしまうた

なら　直に楫を収隠してしまうてくれよ」といふで　さらば歸る事が出來ないで、永く夫婦一所にあり得べければ、といふを言外としたのぢや　かぢは今いふ楫の事で、今のかぢではない　又天の川を渡るには鵲橋によるともいひ　又舟にて渡るともいひ　徒歩わたりするともいひ　又次の歌のやうに紅葉の橋などもいひ　趣向次第にいろ〳〵いふのである

天の川もみぢをはしにわたせばやたなばたづめの秋をしもまつ

天の川は紅葉の枝で橋を渡して通行させる事であるから　それ故でか　時節も多いのに、棚機づめ即ち織女は　秋を例年またるゝ事でもあらうか、といふので　此橋を渡つて夫婦互に逢ふ事ができるから、といふを言外ぢや

戀ひ〳〵て逢夜はこよひ天の河霧立わたりあけずもあらなむ

（長い月日の一年の間）戀ひに戀ひこがれて　偖逢ふといふは　今夜この七月七日の夜只一晩ぢや　からして天の川には霧が一面に立ち蔽うて　眞間と

成つていつまでも夜が明けぬやうにしたいものぢや」「こひ〳〵て」の句中おのづと長き此月日の間といふ情がしられ　「逢夜はこよひ」の語勢　逢といふ夜は今夜只一夜である、といふ程の意が生ずるぢや　さてこれも同情をよせていふたものぢや

寛平の御時、なぬかの夜、うへにさぶらふをのこどもに歌奉れとおほせられける時、人にかはりてよめる、

とものり

あまの川あさせ白波たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

前に舟渡り　又は紅葉の橋などいひ　此には歩渡りとし　又今夜二星が逢ふ由は勿論　或は逢はぬさまによみなすなど　さま〳〵にいふは即ち趣向といふものぢや　「淺瀬しら浪」は、淺瀬を知らぬといふを白波にいひかけたぢや　たどるはポツポツとあゆむ事、こゝではさぐり〳〵あるくに云ふ　「渡り

はてねば」のねばはぬにといふ意、渡りはてもせないのに」といふこと　ねばをぬにの意に用ひるは、古言の一格で、萬葉に多くみえてをる、○牽牛が織女に逢はうとて、天の川を歩渡りするに　どこが淺瀬やら知らないで　白波を脛にかけてポッポッとさぐり〳〵あるき〳〵して　まだ渡り果もせぬ程に夜はサ明けてしまうたわい」といふで　「あさせしらなみ云々」の句調、いかにもたど〳〵とさぐりたどるさまがしられる、句調の妙といふ事がこれらの歌でしられるのである

おなじ御時きさいの宮の歌合のうた、

藤原のおき風

契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふは逢ふかは

（あゝ棚機はどういふ事で、かやうな約束をばしておいた事ぢやらう）最初約束した心がサなさけない　一年の長い月日の内に　只一度逢ふといふは　逢ふとはいはれうか」といふので、逢はぬも同じではないか、といふを言外なぬかの日の夜よめる、

丸河内躬恒

年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよの數ぞすくなかりける、

年々歳々、絶える事なく　永久に逢ふ事ではあるけれども　去かし棚機は一年わづかに一度の事であるから　つまり共々に同寝する夜の數はサ、至て少ない事であるわい

たなばたにかしつる糸のうちはへて年の緒ながく戀やわたらん

「かしつる糸」とは織女祭には彩絲を手向くるもので、其手向ける彩絲を貸しつる糸といふ　「うちはへて」は打延てゝ、糸の縁語　「年の緒」は、月日といふ事ぢやさて此歌は七夕によせて戀の情をのべたものと先哲申されたが、實に左樣である、○今夜織女に手向けてお貸し申した彩絲の　それをやがて打引延して年の緒、即ち經過する月日の長い時間　此棚機と同じに吾が中も常に戀渡

る事であらうか、」

題しらず、　　そせい

今宵こむ人にはあはじたなばたの久しきほどにあえもこそすれ

「あえ」はあやかるといふこと　此歌も戀歌ぢや○今夜來て問ふ人には逢ふといふことはせまい　何故なれば、今夜は七月七日の夜で　棚機が逢ふ夜であるから　其一年に一度といふ久しく稀な緣に　あやかる事がサあるかもしれぬからといふで　すべて「もこそすれ」といふ辭は「もぞする」といふ辭と共に行末をあやぶんで、といふ事があるかもしれぬ」と疑ふ辭である

なぬかの夜のあかつきによめる、　源のむねゆきの朝臣

今はとて別るゝ時はあまの川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる、

（夜が明けるから）今はそんならというて　互に別れて離れる時には　また天の川をも渡らぬ以前に　袖はサすでにびつしよりぬれてしまうたわい、」といふので　別を悲しむ涙でといふを言外。

やうかの日よめる、　にぶのたゞみね

けふよりは今こむ年のきのふをぞいつしかとのみ待ち渡るべき

「わたる」といふ詞は　すべてこゝからかしこへうちかゝるをいふ詞で　川を渡る　橋をわたる　いひ渡る　戀渡る　皆同じである　故に待ちわたるも、今年の七月八日から、來年の七月七日迄常に間斷なく待續ける事ぢや、○今日即ち此七月八日は、二星が昨夜逢うて別れた日ぢやから　これからは又今より後に來るべき年の、七月七日、即ち昨日の日をサ　いつか早く來れかしと絶えず待ちつゞける事であらう、」

題しらず　　よみ人しらず

木のまよりもりくる月の影みれば心づくしの秋は來にけり

木の葉の茂つた間から、もれてくる月の影を見れば　（兎角に木の葉が邪魔に

成つて、心がつかはれる事ぢやが）これについて思へば　只此影ばかりぢやない　何事につけても物哀しくて、心のつかはれる秋となつた事であるわい、といふので　心づくしの寶景を、先づ木のまの月といふので云らせ　さて心盡しのとさら〳〵いひおろしたが、いかにも面白いのぢや

大方の秋來るからに我身こそ悲しきものとおもひ知りぬれ

「大かたの」は、世間一般のといふ程の事ぢや、○世間一般どこにもかしこにも秋は來た事であるのに　我身一人のみがサ、愛く悲しい者のやうに思ひ知られる事よ　さて〳〵何とした事ぞ」といふので　「秋くるからに」とかゝり、「我身こそ」と強くうけ　さて「知りぬれ」と結んだかけ合せから　言外に人に勝れて愛く悲しき事あるを知らせたのぢや。

我ためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞかなしき

我等一人のために、來たといふ秋ではサないのであるのに　（どうしたものか）

夏の間から鳴きはじめた虫の音も　今日といふ今日聞けば　さし向き悲しく、ものあはれに思はれるよ」といふので　秋の氣が深く人を感ぜしむる事をいうたのぢや　秋にしもあらなくにと、強くいひすゑた言外に、「どうしたものか」といふ程の意が生ずるぢや、

物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつゝうつろひゆくをかぎりと思へば

「もみぢ」は此歌では色のかはりゆくこと　「うつろひ」は萎み散るをいふのぢや　○万事万端何かにつけて、秋はサ悲しいことである　はてすべての草木の色が變り〳〵して萎み枯れて行くを終極ぞと思ふからしてサ」といふで　草木について天地の間の萬物が衰へ變ずる事をいふたのぢや

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

宵とは、夕より夜の八時頃までの間をもいひ、又廣く夜をいふ程の事にもいふ　こゝは廣く夜といふ程の事に用ひた者ぢや、○一人で寢た寂床は　草葉の

上に臥したといふではないけれども　秋の來た夜は、時に感じて露つぽい事であるわい、といふので　時に感じて涙の爲にぬれるといふをかやうにいふたのぢや　一人ぬるといふに注目すべきぢや　人と共に居れば話などもして、紛れる事ぢや　一人で居れば紛れる事がないから、時に感じ易いのぢや。

これさだのみこの家の歌合の歌、

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

（心に憂がある身は）いつは物を思はぬ、といふ事はなく　常に絶えず物を思ふ事なれども　殊更に秋の夜といふものはサ、いろ〳〵と物を思ひ續けて、歎かれる至極の時であるわい」　いつはとは云々の言外に、心に憂ある身はといふ事がおのづから含まれてをる。

かみなりのつぼにて、人々あつまりて秋の夜をしむうたよみけるついでによめる、

みつね

神鳴のつぼは、襲芳舍の一名ぢや　つぼとはつぼやかなるより出でたるもので、一局をなして居る殿舍の稱ぢや　秋の夜を惜むとは、夜の明けむ事をしむ事で　月のよい晩などの事とみえる。

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき、

此歌は、詞書にてらしてみれば　襲芳舍に多人數打寄つた人々が夜が更けるに隨つて追々歸り退いて、人少に成つてからよんだものであらう、と正義にみえてをる說が宜しい　㊟かほどまでに、更けてゆくが惜く思はるゝ今夜の景を、（ふりすてゝ歸りゆく人は勿論）無益にわけもなく　寢て明して去まふ人までが　うくつまらぬことに思はれる、といふので、「寐てあかすらん人さへ」のさへの辭を味ふべきぢや　此夜の席をふりすてゝ歸る人の、情がないといふ事を土臺としていうた事がおのづからしられる　これが此人の獨得の妙所である。

題しらず

よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁のかげさへみゆるあきの夜の月

四の句、普通本には、數さへとあるが、異本に影さへとある方が宜しい由、先哲も申された、今もそれに從ふのぢや　「はねうちかはし」は、雁と雁とが互に羽をうち交すこと　雲にうち合はせるではないと遠鏡の説の通りぢや、○白雲の棚引いてをる高い空に　互に羽を打交し合うて　飛んでゆく雁の　影までも見る事ができる程の秋の月よ、といふので　さて〳〵さやかに明かな事ぢやといふを言外。

さよなかと夜はふけぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ

此歌は萬葉集第九にみえて、弓削皇子に奉る三首の歌の一首である　序文には萬葉に入らぬ歌を採る由、記してあるが　猶彼是見えるとの事は、すでに其處でお話し申した通りである　さて「さよ中」とは眞夜中といふ事　「月わたる」は月がこゝよりかしこへ至るをいふ　わたるといふ詞は、前にも申した通り、すべてこゝからかしこへ達する事　川を渡る　橋を渡るの類で　こゝは月が東から西へ至る事　即ち傾いたのぢや　此歌は夜中にふと目がさめた處が、雁が鳴いて通る故、其方の空をみた處が、月が傾いてをるから、詠んだもので、○アア夜はすでに夜中となつたらしい　あれあの雁が鳴いて渡る空をみれば　月はやうやく西の空に傾いてをる事であるから、といふので　さら〳〵とわけもなくつゞけた歌ぢやが、けしきがおのづと月にみるやうに思はれる。

これさだのみこの家の歌合によめる、

大江千里

月みればちゞに物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど

秋の夜の月を見れば　種々さま〳〵　千万數へ盡されぬ悲哀の情がおこる事である　というて我等一人の秋といふではなく　世間一般の秋ではあるけれど、といふので　「悲しけれ」といひすゑて　「秋にはあらねど」とうけた懸合せから　あらねどの句の下に、どうも我一人のみが悲しいやうな氣もちがしてたまらぬ、と云ふ程の餘情が生ずるので、感の深い歌ぢや。

たゞみね

久方の月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらん

「久方の」は枕詞「月の桂といふ事は、兼名苑に、月中桂、長二百五十丈、月輪内有之、下有河、此木秋花開　又酉陽雜俎に、月桂高五百丈、下有一人、常斫之、樹創隨合、人姓吳名剛、西河人、學仙有過、謫令伐樹、云々などあるから云ひ出されたものぢや、○此人間世界では、秋が來れば木の葉が色付く事ぢやが、月の中にあるといふ桂の木も　秋となれば、やはり人間世界の樹木のやうに　紅葉する事とみえて平常よりも光りがます事であらうか、畢竟桂が紅葉するに依て、月の光がかやうに照り增る事ぢやらう。

月をよめる、　在原元方

秋のよの月の光しあかければくらぶのやまもこえぬべらなり

倉部山は、山城の名所ぢやといふは、春の部で申した通り、○秋の夜の月の光がサ、かやうに明るい事であるから　なんぼくらい暗部の山でも　とんとさしつかへなく　安々と越えられべき事とおもはれるぢや。

人のもとにまかれりける夜、きり〴〵すの鳴きけるを聞きて　藤原のたゞふさ

よめる、

人のもとは、女のところぢや、と正義にあるが宜しい　きりぎりすは蟋蟀で今いふこほろぎの事ぢや、

きり〴〵すいたくなゝきそ秋の夜の長きおもひは我ぞまされる、

女の家に泊つた晩に、蟋蟀がなくのを、やがて女によせて詠んだものぢや、○きり〴〵すよ　さやうに甚しく歎きなくことなかれ　此秋の夜のやうに　長く深く至極せる思の程は　我がサ立增つてをる事なるに、といふので　秋の夜は長くといふ爲に、時節の詞で枕詞のやうにおいたもの　長きは深いと同じで、至極した事ぢや、

是貞のみこの家の歌合のうた、　としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもあらずなく虫は我ごと物や悲しかるらむ

此長い秋の夜が　明けてゆくをもしらないで　一途に鳴いてをる虫は　わしのやうにもの思ひがあつて　悲しいからのことであらうといふので　それでなくては、明けるまでなく事はあるまいといふが言外、

題しらず、　よみ人しらず

秋はぎも色づきぬれば蚕わ、がねぬごとやよるはかなしき

秋萩の葉も色が變つて　段々と枯れかゝる時節になれば(すべての事が物悲しくて、夜も眠られず、色々の事が考へられるが)蚕もわしがねられぬやうによるが悲しい事か」といふで、夜通しないてをる事よ、といふを言外「わがねぬごとや」の句中、すべての事云々の意がおのづからしられる、

秋の夜はつゆこそことに寒からし草村ごとに虫のわぶれば

秋の夜は、風も寒いが　露がサ殊更寒いことらしい　あれあのやうに、どこの草むらにも　虫が佗しがつて聲々になくから」といふので　それゆゑ左樣にしられるといふを言外としたので　深夜おく露のしげいを、虫のねでしつたさまにいうたぢや　此「わぶれば」といふを「わぶるは」の寫し誤ぢやの　又は「わぶるは」といふべきをなだらめていふなどいふは　皆誤ぢや　「わぶれば」といひさして、とゞめて、さやうに思はるゝといふを知らせたかけ合せが、おもしろいのぢや　古來の解釋いづれもあたらない

君ゐのぶくさにやつるゝ古里はまつ虫のねぞ悲しかりける、

これは歌に依て考へるに主人がなくなつた家に來てみるに、住居があれて、昔の面影もなく　折しも秋の事で、虫の聲がうら悲しく聞ゑるから、よんだものらしい　君しのぶのしのぶは、思ひ慕ふ事　それをしのぶ草にいひかけたのぢや　坦衣は古い軒などに生ずる苔の類で　今いふしのぶではない、○君を慕ひしのぶといふ、其しのぶ草が生茂りて、荒れ果てた君が家、即ち故郷に來てみれば　歸り來ぬ人を尙ほ歸るものとして、待つが如き　松虫の音がサ　いかにも悲しい事であるわい、」

秋の野にみちもまどひぬ松虫の聲するかたに宿やからまし、

これは、色々の花草が咲みだれて、面白い野に遊びくらしてよんだ歌とみえる、

○今日は終日秋の野に遊びくらして　歸る道もわからずなつた　よし〳〵
我をまつといふに緣がある名の、松虫の聲がする方に　宿を借りて泊つてゆ
きませう、」

秋の野に人まつむしのこゑすなりわれかとゆきていざとぶら
はむ、

「とぶらふ」は、訪問すること　「聲すなり」のなりは歎息のなりで、決定のなりではない、○あれ、秋の野に人を待つといふ　松虫の聲がすることかいナ　其の待つといふはわしぢやかとて　其場所へ往てサア訪問せやう、」

もみぢばの散りてつもれる我宿に誰をまつ虫こゝらなくらむ

「こゝら」は聲の頻るをいふ　松虫の聲はリン〳〵と聲の頻るものぢや、但し今はリン〳〵となくは鈴虫、チンチロリンが松虫ぢやが、實は反對で　チンチロリンは鈴虫ぢや　さて此歌は「紅葉ばのちりて」と云ひ「つもれる」といふに注目すべきぢや　紅葉が散らぬ程ならば、見物ながら來る人もあらう　然るに

其紅葉は散つて、しかもつもるとあるからは、人の問はぬといふ事は、いはずともである、○偖かやうに紅葉は、すでに散つて　しかも庭に積つて、誰一人として尋ねくる人もない我宿であるのに　何人を待つとて、松虫が聲を頻つて鳴き立つるであらう、」といふのぢや　此歌紅葉のちる時分は、松虫が盛になく事はないから、後撰集や　六帖などに　此上の句が「秋の野に來やどる人もおもほえず」とある方がよいといふ說があるが　これは此こゝらといふ詞を、澤山な虫の鳴く事とみたからの誤である　こゝらは前にいふ通り數の事ではない　聲のしきる事ぢや　から一つでも二つでも聲がしきるは、ここらなくのぢや、

ひぐらしの鳴きつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげにぞ
ありける

なへには並にて、それと共にとの辭、今いふ「それと同時に」の意ぢや、○蜩の鳴く聲と同時に、暗くなつたから、日が暮れるのかと思うたは　さうではなかつた　全く日が傾いて　山の影になつたからの事でサ、あつたわい、」といふので　山

中のありさまを、まことによくいひのべた歌である　さて此歌の四の句思へば」と定家卿の家本にある由正義にいうてある　それなら殊に面白く聞える

思へばさうではない　山の影であつたといふぢやからだ　又「見えし」はいふ本もあるが、こゝはみえしといふはいかゝぢや　思へばとあるかたがよろしいぢや

ひぐらしのなく山ざとの夕ぐれは風より外にとふ人もなし

蜩が鳴く此山中の夕暮となれば　戸障子の類を吹働かす風より外には　とんと音づれとふ人もない事ぢや」といふで　さて〳〵淋しい事である、といふを言外にしたのぢやが　さら〳〵といひつゞけた餘情に、夕方となれば木樵は歸り、鳥はなかず　只風のみおとづれる淋しいさまが　何となくしられる處が妙ぢや

はつかりをよめる、　在原元方

まつ人にあらぬものからはつ雁のけさ鳴聲のめづらしきかな

「ものから」に二つの別ある事はすでに申した通りで、こゝのものからもものなからの意ぢや、○待つ人といふでもないものながら　ことし始めて渡つて來た雁の　今朝鳴いて渡る聲を聞けば　丁度待つて居た人に逢うたやうに珍しく嬉しく感ぜられる事よマア」

是貞のみこの家の歌合のうた、　とものり

秋風に初かりがねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらん

玉梓は、もと使といふにかゝる枕詞であるを　使は手紙をもたせてやるものであるから、やがて打任せて手紙の事を玉梓といふことゝなつたのぢや　偖又雁に手紙の事をいふは　蘇武の話に起つた事で　漢ノ武帝の時蘇武といふ人が漢から匈奴へ使者となつて往たところが、匈奴は之を檎にして歸さないで、漢へ對しては蘇武は病んで死んだ由を告げた　其後十八年を經て漢の昭帝の時漢の使者が匈奴へ往つた時　天子上林苑中で雁を射ておとしたりしに、足に手紙が結付けてあり　之を見るに蘇武が某ノ澤中にて書きて結付けたるものぢや、とて、匈奴の王單于に言うた處が、單于大に恐れて蘇武を漢に還し

た、といふ事が漢書にある　これから雁に書といふ事をいふのぢや、〇秋風が吹くにつけて　始めて渡つて來る初雁金の聲が聞える事かいナ　マア何人の手紙を足に結付けて來た事であらう、といふので　ゆかしいことぢや、見たい事ぢやといふを言外、

だいしらず

我門にいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹く風に雁は來にけり　よみ人しらず

いなおほせ鳥は春上もゝちどりの歌のところで申した通り、古今三鳥の内の一つで、やかましい事であるが　此鳥は、ももちどりや、よぶこ鳥とはちがつて　聢とわからない　にはくなふり　庭たゝき　石たゝき　いしくなき　とつぎをしへ鳥　などいふは皆鶺鴒の事ぢや　又河原鶺ぢやといふ説もあるが　わからぬ事はわからぬ事として　とに角雁の來る時分鳴くものと見ておいて宜しい事ぢや、〇わしの門のあたりに　稲令命鳥が來鳴くと同時に今朝肌寒く秋風がふいて　雁が渡つて來た事であるわい、といふので　さて時節がうつり變つてゆくは速かなものぢやといふを言外、

いとはやも鳴きぬる鴈か白露の色どる木ゝももみぢあへなくに

「もみぢあへなくに」は、紅葉もしはじめないにとの事　あへなくにはまださやうに至らぬにといふ事ぢや、〇至つて早くもマア鳴いて渡り來た雁であるかナア　白露がおいて　濃く薄くさま〴〵に色を染めなす木々の葉も　まだ一向に染めはじめないのにマア、

春がすみかすみていにし雁がねは今ぞなくなる朝霧のうへに

春霞を分けて影もおぼろに打霞みて歸り去つたりし雁は、只つひ此程のやうに思はれるに)今サ、モウ鳴いて渡つて來たわい　あれあのやうに霞に似た霧の上にサ」といふので、「春霞かすみていにし」と詞を重ねていうた處に、おのづとほのぼのと霞んだ空をかき分けてゆくけしきが匂ひ　「今ぞなくなる」と強くいうた語勢から　上の句と下の句との間に、つひ此程のやうに思ふに、といふ如き意を生じて　時節が移り變る事の速かなを歎ずる情が溢れて聞え　又春

霞と秋霧との二つをかけ合せて、詞をあやなしたである　こゝらが最も味ふべき處ぢや　さて此歌を古今著聞集等に寛平歌合の時の友則の歌とし、左方に入りしに　初五文字をよみたる時、右方笑ひ出したるが　霞みていにしといひたれば、音もせずなつたといふ話があるが、これは信けられない說ぢや　此集の撰者の歌で、しかも寛平歌合の時の歌なるからには、なんでこゝに讀人しらず、として出すべき筈があらう　これは後世つくり設けた話に相違ないこれは序にお話し申しおくのである、

夜を寒み衣かりがねなくなへに萩のした葉もうつろひにけり

「夜をさむみ」は夜が寒くてといふ事である、といふは、すでに申した通りぢや　さて、夜が寒くて、衣を借りるといふを雁にかけ　序歌の體を時節のものでいうたのぢや、○夜が寒くて着物を借りるといふ　其雁が鳴くと同時に　萩の下葉も色がかはつて、そろ〳〵と散りがたになつて來た事であるわい」　衣を借りるといふ事、昔は互にかせあうた風習であつたからいふのぢや、

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、

藤原菅根朝臣

秋風に聲を帆にあげてくる舟はあまのと渡る鴈にぞ有りける

「ほにあげて」は、ほ。とはすべて、目に觸れ顯るゝこと　ほにいづ　ほにあらはるの類ぢや　此ほ。といふを、舟の帆にかけ　さて鳴き渡るを帆にあげてといひなしたぢや　「あまのと」のとは。とはすべて出入口をいふ　かど　せど　は家にいふもの　みなと　川と　は水にいふもの　天の戸といふも、月日の出入口をいふから起つて、ついに天の事をいふ事となつたのである、○秋風がふくまゝに　聲を高く帆に打揚げて來る舟の形したものは　あれあのやうに青く、とんと海のやうにみえる天を渡つてゆく雁でサある事であるわい、」

かりの鳴きけるをきゝてよめる、　みつね

うき事を思ひつらねて雁がねの鳴きこそわたれ秋のよなよ、な

これは雁の聲を聞いて　自身の物思の事によせてよんだものぢや　思ひつらねて」は思ひつゞけてといふ事ぢや　雁は列なり渡るものぢやから、其緣語

でつらねてといふたのぢや　○色々世のうくはかない事をおもひつゞけて
あの鳴いて渡る雁と同じに　わしも亦鳴いてサ　夜を明かす事である
此長い秋の夜を毎晩々々」

これさだのみこの家の歌あはせの歌、

たゞみね

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねにめをさましつつ

山家は　いつでも〳〵淋しい事ではあるが　秋はサ殊更に淋しく侘しい事であるわい　はてサ鹿が程近い處で鳴く聲に　よくも寐られず、目をさましつ〳〵してはサ」鹿のなくねに目をさます、といふので、程遠からぬ處で鳴く、といふ事がしられ「秋こそわびしけれ」と強くかゝつて「めをさましつゝ」とうけ、かけ合せの語勢で　秋の長夜にたび〳〵目をさまして、淋しさにえたへず、明しかねるさまが何となくしられる

よみ人しらず

おく山にもみぢふみ分けなく鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき

（秋はすべて物哀な事が多いが其中でも紅葉もすでに散る時分　奥山に其散た紅葉を蹈みつゝ分入つて　鳴く鹿の聲を聞いた時ほどサ　悲しく哀れに感じる事はない、といふので　「時ぞ秋はかなしき」といふ語調から　秋はすべて物哀な中にもといふ意が、おのづから生ずるぢや　偖此「ふみ分け」といふに、人がふみ分けといふと、鹿がふみ分けといふと、二説」がある　どちらでも聞えるが、今は姑く人が蹈分るといふで御話し申た事ぢや　偖又此歌は百人一首では、猿丸太夫としてあるが、此集にかやうにあるからは讀人しらずの歌ぢや

題しらず

秋はぎにうらびれをれば足引の山したとよみ鹿のなくらむ

初句奥義抄に、普通の本には「秋風に」とある由みえて、打聽にも、然るべき由いはれたが、無論從ふべきである　これは萬葉十に、君にこひうらぶれをればしきの野に秋萩しのぎさをしかなくも」とある歌の似たるなどから誤つたものぢ

やらう、依て今は秋風にとして御話申す　「うらびれ」は萬葉に「うらぶれ」とある詞と同じで、心の佗しく悲しいと、「うらびれをれば」は「うらびれをるに」といふ意で、るに、といふを、れば、といふは、古い詞づかひの一格で、萬葉に多くある　前にいうた「君にこひうらぶれをれば」や、同十君にこひしなひうらぶれ我をれば、秋風ふきて月かたぶきぬ」此外澤山例がある　遠鏡に「をれば」は「をるに」の意とあるは、「さすがにさる大先生の説ぢや　只古い一格といふ事、及び例を引かれぬが殘念の事である　此説を非として彼是いうた説もあるが、語法を知らぬ論で取るに足らぬ　猶此れば」の詞は別にひろく例をあげてしるしておいた、それで御承知ありたい、○秋風が吹くについて心が物悲しく佗しく思はれるのに　かてゝ加へてあの山の麓で　多くの鹿が悲しい聲で何故とよみ泣く事であらう」といふので　アゝモウ堪へられない、といふを言外ぢや、「鹿のなくらん」は例の何故なくらんの意ぢや　此歌古來の解釋いづれもすべて十分でない

秋萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えずておとのさやけさ

しがらみは、すべて其ものをたわめからめる事にいふ　河にいふも、竹柴の類をたわめからめもかからめ越りれば水ぢや、「水とは川に限らず流れて居る水」

といふをおとともいうたものぢや、○秋萩の生茂つた中に在つて　それを踏みたわましからみ伏せて鳴く鹿は　萩の中にあるからして、目にはみえないが　其鳴く聲は甚わざやかに聞える事ぢや、」

これ貞のみ子の家の歌合のうた、

藤原のとしゆき朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿は今やなくらむ

萩と鹿とは、前に申した通り　梅に鶯　花橘に時鳥の類で、時節のものを取合せたのぢや　其内萩をば、鹿の花妻などさへいふによりて、今は萩に依つて鹿の事を思ふのである　高砂は播磨國の名所にもあるが、此歌では只山の事にいふのぢや　高砂を山の事にいふは、支那の書に、砂が積んで山となるとある

から起つたものといふ　尾上は山の裾を長く引いた上の方をいふ事で、やがて嶺の邊までをもいふ詞である　○秋萩の花がアヽきれいに咲いた事で、あるわい　これで思へば、あの高砂の山の峰の邊では　鹿ももはや鳴く事であらう、」

むかしあひしりて侍りける人の秋の野にてあひてものがたりしけるついでによめる、　みつね

以前契つた女に、秋の野遊などした時、圖らず面會して、さて昔の事などはなしあうた時　わざとよんだといふでなく、獨言のやうにいうたのぢや　「ついで」といふは其意ぢや、前のかみなりのつぼ云々の端書の「ついで」とあるを見合せて心得べき由、先哲も申された

秋萩の古枝にさける花みればもとの心はわすれざりけり

これは年久しく中絶えて居たが、今日圖らず面會して話して見れば、昔契つた時分の有樣とかはる事なく、以前の情を忘れず、といふを　萩に寄せていうたもので　○秋萩の　去年の古枝について花が咲いたを見れば　やはりもとの情をば忘れぬ事であるわい、」といふので　「古枝に咲ける」といふを、昔契つた人に逢うた事によそへ　「花みれば」は、あひて話す事にいひ　さて「もとの心云々」を以前の情を忘れぬにいうたのぢや

題しらず、　よみ人しらず

秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

「秋が段々ふけて、萩の下葉も色が變り　そろ〳〵散り仕度をするけふ此頃からは、夜は追々長くなるし時節はます〳〵悲しくなる事ぢやから獨り住のわしのやうな者は　慰めやうもなくて、寐られかねて夜を明しかねる事と思はれる」といふので　さて〳〵わびしい事よ、といふを言外としたのぢや　「いねがてにする」は、いねがてにせん」といふよりは一層決定していふ辭　色づくは今といふへついけてみるのぢや、下葉色づくと切れるではない　さて又色づく、今よりや」とかゝつて、「ひとりある人云々」とうけた、かけ合せの間に、おのづと夜は追々長く云々の餘情を生ずるである

鳴渡る鴈のなみだや落ちつらん物思ふ宿のはぎの上の露

あの鳴いて渡つてゆく雁もわしと同じく物を歎くこと丶思はれるが　其なく涙がおちて、あのやうに置く事でもあらうか　色々物を思ふ我が宿の萩の上に　あのやうにしげくおく露は」といふので　自身が物思ふからして、雁も物思ひあるよりなく事としてよんだものぢや

萩の露玉にぬかむとたればけぬよしみん人は枝ながら見よ

萩におく露が、きら〳〵して、いかにも立派ぢやに依つて　玉を貫くやうに、糸にぬき通さんとして　手に取ればすぐ消えてしまうた　よし〳〵そんなら、之を見やうとする人は　枝のままそれなりにみるがよろしい、」といふのでをさなく、あどけなくよんだが面白いぢや

をりてみばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわ丶におけるしらつゆ

ア、奇麗なこと、どうか折取て見たいことぢやが　さうしたら落ち散つてしまふ事であらう　あの秋萩の枝もたわ〳〵になるまでに　しげく置いてある露よ」といふので　ぢやからやはりこのまゝで見る事とせやうを言外

萩がはなちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかむさ夜はふくとも

露霜といふに、露と霜との二つをいふものと　暮秋の頃露が霜と變ずるをいふものと、の差別がある　露が霜と變ずるもの丶方は、つゆじも」とし。しを濁つて云ふ、こゝに云ふはつゆじも」で、霜と變ずるもの丶事ぢや　さよは前にいふ通り、真夜で、夜といふ事、小夜と書くから霄とするは誤ぢや、　さて此歌は戀歌で、女の許、即ち妹許行く歌ぢやが、萩の花の事があるから秋に入れたものぢや、○秋がふけて、萩の花がちるであらう頃の野べの露じもに　衣をぬらして分けゆくは、くるしき事ぢやが　それをも厭はずしてサ行かう事ぞ、たとへ夜は更けるとても、」といふので　ぬれてを」のをは、歎辭の意の重いものぢやから、自然と詞がつよく聞える事となる　それ故古くは強めの辭ともいうたである

是貞のみこの歌合のうた、

文屋朝康

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘のいとすぢ

秋の野一面におき渡した露は　玉のやうぢやが　眞の玉であらう　蜘の糸筋でぬき通してあるを見れば、といふので　「玉なれや」は、玉なればにやあらんといふ意　此れやといふには五つの差別がある、委しくは皇國文法釋義に申しておいた

題しらず、　僧正遍昭

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人にかたるな

「をれる」は折るといふ事ぢや、これを下るゝ事といふは誤で、下るは下るゝとはいふが、下れるとはいはれない　「おちにき」は墮落する事、僧の女に通ずるを墮落といふ、○草花でありながら、人のやうにをみなといふ名がをかしいから折つてみるばかりぢやぞ、女郎花よ　我等は僧ぢやから僧が女に手を觸れるは、墮落したのぢやと人に語り告ぐるな、とたはぶれにいうたので　此僧正はかやうな口輕い事をいふ人ぢや　小町が「苔の衣を我にかさなむ」とよみかけた時も「世をそむく苔の衣は只一重かさねば寒しいざふたりねん」といひて、影をかくしたなども思ふべきである

僧正遍昭がもとに、ならへまかりける時に、をとこ山にてをみなへしをみてよめる。　ふるのいまみち

女郎花うしと見つゝぞゆきすぐる男山にしたてりと思へば

「うし」は心憂き事にいふ詞ぢやが、こゝでは心うくにが〳〵しい事にいふのぢや、○あの咲いてをる女郎花を　我等は心うくにが〳〵しい事ぢやとみながら行き過ぎる事である　ハテ女郎花とてをみなの名があるものぢやのにかやうに男山にサ立つて居るよと思ふからサ

是貞のみこの家の歌合のうた、　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに

「旅ならなく」には、旅といふ事で　即ち歸れば歸られるけれどゝいふのぢや　これを、實は旅ぢやけれど、名をむつましみ旅の心地もせず、

といふ事ぢや、といふは、なくにといふ辭をしらぬ說ぢや　○秋の野に　わしは泊つて行かうかしらん　女郎花のをみなといふ名が、いかにもなつかしく睦ましう思はれるから　旅といふではない、即ち歸れば歸られる事ぢやけれど、」といふのぢや、

題しらず、

女郎花おほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ

小野のよしき

「あやなく」は、らちもないといふ詞ぢや、といふ事は、すでに申しおいた、○女郎花が澤山ある野べに　泊つていつた事であらうならば　らちもなく色めきあだつぽいといふ名がたつであらう」といふので　これも女といふによせてよんだものぢや、

すざくゐんの女郎花合せによみて奉りける、

左のおほいまうちぎみ

朱雀院は、宇多上皇の御所を申すのぢや　女郎花合は、左右に分つて、之をくらべて勝負を定める事で　扇合　草合　繪合の類ぢや

女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

あれあの女郎花は　秋の野風が吹くまゝに　一向にそれに打靡く事ぢやが　心の全部を誰に注いでは、必全體といふ事で、心のまるきりといふのぢや

藤原定方朝臣

秋ならであふことかたき女郎花あまの河原におひぬものゆゑ

「ものゆゑ」は、ものなるのにの意といふ事は、已に申した通りぢや、○秋でなくては　あふ事が出來にくい女郎花であるよ　一年一度秋に限るといふ、棚機の天の川に生るものでもないものなるのに、」といふので　天の川原にの句中に、一年一度秋に限るといふ意が、おのづから含まるのぢや　さてこれもをみなの名を織女におもひ寄せたのである

たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色にでゝまだきうつろふ

秋に飽を兼ねていうたぢや「まだき」はいまだしき事で、こゝでは早速にといふこと　これも女になぞらへていうたのぢや、○誰が私の、飽いたといふではない、飽かないであるものなるのに　女郎花よ　なぜさやうに色に顯はれて早速に移ろひ變る事ぞ」　うつろふは、移り變る事、花のあせ衰へるを、容色の衰へるにかけていうたのぢや

妻こふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野の花としらずや

これも女によそへていうたぢや○妻を戀うて鳴く鹿の聲がするが　其野には女郎花が咲いてをる　自分が住む野に此女といふ女郎花が、咲いてをるといふ事は　しらない事か、といふで　しらぬから妻こうて鳴くならん、といふを言外

女郎花吹過ぎてくる秋風はめには見えねど香こそしるけれ

女郎花は、別に香氣が高い花ではないが　これも女といふにあやなして　女の追風を思はせていふたものぢや、○女郎花の咲いて居るところを　吹過ぎて來る秋風は　形こそ目には見えないけれど　其薫でよくわかることであるわい」

人の見ることやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるらん

これも女によせて、女は人に見らるゝを恥づるものぢやからいふので○人の見る事を　苦しく思ふからの事でもあるか　あれあの女郎花は　いつも秋霧にばかり立ちかくれるやうにするであらう、

ひとりのみながむるよりは女郎花我すむ宿にうゑてみましを

「ひとり」は一株といふではない　女が男にあはないで獨身であるといふ事によそへていうたぢや、と遠鏡の説ぢや、○只一人で、あのやうにしほ〳〵としてばかりくらして居らんよりは　女郎花よ　わしが住んで居る家に、移しうゑ

て　朝夕に寵愛して見てやらうものを、といふので　あゝしておくはをしい
ものといふを言外

物へまかりけるに、人の家にをみなへし植ゑたりけるをみて
よめる、　　兼覽王

女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれば

「うしろめたく」は氣づかはしく、不安心といふ意ぢや　これも女にたとへて
女といふものは、親兄弟などが氣をつけて、大切に保護するが、通例の振合であ
るから、いうたものぢや、○此女郎花の女は　いかにも氣づかはしく不安心な
ることにおもはれる事であるよナア　かやうに荒果てた家に　別に保護す
る人もなく、只一人で立つてをる事であるから、

寛平の御時、くらうど所のをのこども、さが野に花みんとてま
かりたりける時、かへるとてみな歌よみけるついでによめる

藏人所とは、藏人の詰所の名ぢや、藏人とは、主上の御側に在て玉座近の御用を
取扱ふ職で、頭二人、五位三人、六位四人、外に非藏人といふもある　をのこども
はこれらをすべていふのぢや

花にあかでなにかへるらん女郎花多かる野べに寐なまし物を

花に飽いたといふ事なら格別ぢやが　飽もせんのに、なぜ歸ることであらう
其花の中には女といふ名の、女郎花が　澤山立つて居る野邊であるから
寢てゆかんものを、さてこれ迄の十三首が女郎花で、此次から藤袴其外ぢや

是貞のみこの歌合によめる、　　としゆきの朝臣

何人かきてぬぎかけし藤袴くるあきごとに野べをにほはす

藤袴といふから、袴によそへていうた歌で、○何人即ち誰が此野に來て、脱ぎて
かけて去つた藤袴であるぞ　毎年々々秋となる度々に、野べを匂はせて　た
きこめおいた香が、いつまでもうせぬ事よ、といふで　脱ぎかけといひ、匂はす

て　朝夕に寵愛して見てやらうものを、といふので　あゝしておくはをしい
ものといふを言外

物へまかりけるに、人の家にをみなへし植ゑたりけるをみて
よめる、　　兼覽王

女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれば

「うしろめたく」は氣づかはしく、不安心といふ意ぢや　これも女にたとへて
女といふものは、親兄弟などが氣をつけて、大切に保護するが、通例の振合であ
るから、いうたものぢや、○此女郎花の女は　いかにも氣づかはしく不安心な
ることにおもはれる事であるよナア　かやうに荒果てた家に　別に保護す
る人もなく、只一人で立つてをる事であるから、

寛平の御時、くらうど所のをのこども、さが野に花みんとてま
かりたりける時、かへるとてみな歌よみけるついでによめる

藏人所とは、藏人の詰所の名ぢや、藏人とは、主上の御側に在て玉座近の御用を
取扱ふ職で、頭二人、五位三人、六位四人、外に非藏人といふもある　をのこども
はこれらをすべていふのぢや

平貞文

花にあかでなにかへるらん女郎花多かる野べに寐なまし物を

花に飽いたといふ事なら格別ぢやが　飽もせんのに、なぜ歸ることであらう
其花の中には女といふ名の、女郎花が　澤山立つて居る野邊であるから
寐てゆかんものを、さてこれ迄の十三首が女郎花で、此次から藤袴其外ぢや

是貞のみこの歌合によめる、　　としゆきの朝臣

何人かきてぬぎかけし藤袴くるあきごとに野べをにほはす

藤袴といふから、袴によそへていうた歌で、○何人即ち誰が此野に來て、脱ぎて
かけて去つた藤袴であるぞ　毎年々々秋となる度々に野べを匂はせて　た
きこめおいた香が、いつまでもうせぬ事よ、といふで　脱ぎかけといひ、匂はす

といふ、共に袴の縁語　藤袴は香の高いものであるからぢや

ふぢばかまをよみて人につかはしける、　つらゆき

こゝに人とあるは女の事で、契つた女のところへよんでやつたのぢや

やどりせし人のかたみか藤袴わすられがたき香に匂ひつゝ

泊つて往た人、即ち君の、これが形見に脱いでおかれたものであるか　此藤袴よ　どうも忘れる事のできないやうな、ゆかしい、なつかしい、香に匂ひ匂ひつする事よ」

そせい

ふぢばかまをよめる、

ぬゑしらぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

昔は衣服へたきこめる香の調合法には　最も深く注意したものぢやから其香氣で誰の香であるといふ事も大方分る程の事であつたらうそれ故主しらぬ香などもいふぢやと正義にみえてをる、○誰とも其主のわからぬ香にサ、匂うて居る事ぢや、此秋の野に、何人が脱いでかけて往つた、藤袴ぞやマア、」といふので　ぞもは問かけのぞに、歎息のもがそうたものである

平貞文

だいしらず

今よりはうゑてだにみじ花薄ほにづる秋はわびしかりけり

「花ずゝき」とは、旗ずゝきといふはたが轉じて、はなとなつたので　薄のなびくは旗に似てをるからいふのぢや　故に万葉には多く旗薄とみえてをる　旗といふより花といふ方が、詞が奇麗に聞えるから、後には花薄といふ事となつたぢや　○薄は愛すべきものとばかり思うて居たが、いやく　さうでない今からしては、植ゑて、でさへみるといふことはせまい　ほに出て招く秋の頃、之を見れば、淋しくいやな氣もちがするわい、といふで　今よりは云々といふ言外、おのづと薄は愛すべきものと思ひしが、といふ意を含む

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌、　ありはらの棟梁

秋の野のくさの袂か花すゝきほにでゝまねく袖とみゆらん

此歌古來の説皆説きえない　「草の袂か」は、即ち花薄の事をいふので　かは問

かけのかぢや　「花すゝき」は、ほにでゝといはんため、實物を以て枕詞においたもの　ほにでゝは形に影れて、といふ意　即ち人が形に顯れてさし招く袖の如しといふのぢや　薄のほにいでゝ招くさまを、遠くからみれば、人が袖をあげて招くやうにみえるから、よんだもので、○あれあのみえるは　あれでも秋の野の草の袂であるか　即ち花薄の袂であるか　マアそれがこゝからみれば、(花すゝき)形に顯れて招く人の袖のやうにみえるであらう、といふので　花すゝきと實物を枕詞にたいて、詞をのどめたうちに、「マアそれが」といふやうな意が生ずるのぢや

我のみやあはれと思はむきりぐ〳〵すなくゆふかげのやまとなでしこ　素性法師

「ゆふかげ」は夕日の影のうすれたこと　「やまとなでしこ」は唐撫子に對する名　薄紅色のさつぱりした花の事ぢや、○我一人のみで、あゝおもしろいと見て居るべき事か　きり〳〵すが悲しく、物あはれになく秋の夕日影に、ほの〳〵とてらされて咲いてをる、此やまとなでしこの花を、といふので　偖々興がない事ぢや　誰かきて見ればよいに、といふ意が言外ぢや

題しらず、　よみ人しらず

○みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

どれも皆同じに青く、緑色な一樣の草ぢやと、春の時分は見た事で有つたが、秋となつて見れば、種々さまぐに奇麗な花の咲く草でサあつたわい」

もゝ草の花のひもとく秋のゝにおもひたはれん人なとがめそ

花の咲くを、花の紐とくといふ　又紐とくは男女の同寢するにもいふから、こゝではそれにかけていうたぢや　又男女があふことを「たはく」とも「たはる」といふ、これもそれにかけたぢや、○色々樣々の百草が、花の紐をといてみだれ咲いて居る野に、うかれて、我等も十分たはけを盡さうことである、見る人々よ咎むるな、ゆるせ〳〵」

つき草にころもはすらむ朝露にぬれての後はうつろひぬとも

月草は、露草の事で、字では鴨頭草　鴨跖草なども書く　藍色の花が咲いて、物につき易いから、着草といふといふ事ぢや　昔は此花で多く衣を染めた事ぢやが、さめ易いものぢやから、うつろひ易いと云ひならはした事ぢや、うつろふとは褪める事ぢや　○月草の花は奇麗な色ぢやから、衣物をば此花ですり染める事としやう　たとへ朝露で鳥渡ぬれゝばすぐ色がさめてしまうとても、といふのぢや　此歌はもと萬葉七の譬喩歌の中に出て居て、四の句「ぬれて後には」と有つて戀歌ぢや　一度でも逢ふ事なら、跡は變つても厭はない、といふ歌であるを、こゝでは只月草の歌としてのせたのである

仁和のみかど、みこにおはしましける時、ふるの瀧御覽ぜむとておはしける道に、遍昭が母の家にやどりたまへる時に、庭を秋の野につくりて、たほんものがたりのついでによみて奉りける

僧正へんぜう

「庭を秋の野につくりて」とあるに目を注くべきじや　遍昭が母は、桓武天皇の御子良峰安世卿の妻である事ぢやから、御住宅も立派で有つた事であらう其庭をわざと秋の野に造られたので、風流の物數奇ぢや

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

「里はあれて」に遍昭が出家して、世に立たぬ意をよせたもの　「人はふりにし」は、母の事、老いたをいふ　「れや」は前に申した通五種の差別があるが、こゝは「ればにや」の意である、○世に立つべき人が家を出たに依て　里は荒れはて、家に住居してある人は、年を取つて老い衰へたといふ家の故でもありませうが、庭といひ、籬といひ、全く秋の野となつた事であります」といふので　かやうな處へ御宿を申上げること、さて〳〵恐入た事といふを言外

古今集詳解秋上卷之四　終

古今和歌集卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌、　文屋のやすひで

吹からに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらん

「しをるれば」は、萎れ枯れて移ろひゆくを云ふ　うべは、げに尤もの事ぢやと諾ひ承知すること故に諾の字を訓まする事ぢや　この歌ではげにもといふ程の意に用ひたのである。○吹くからして、秋の草や木やが、どれもこれもすべて萎れ枯れて變じ移ろひゆく事ぢやに依つて　げにも山風を名けて、荒と云ふ事であらうと云ふで　あらしは荒かすと云ふ、風をしといふから、荒風と云ふ意と云説もあるが　それはとに角、此歌では只荒かすと云意に用ひた事ぢや

草も木もいろかはれどもわたつみの波のはなにぞ秋なかりける

る

秋の時節となれば、草でも、木でも、すべて一般に色が變じて、移ろひ枯れてゆく事なれども、あの海の上にさく浪の花ばかりには、秋と云ふ事がなくて、いつでも〳〵同じやうであるわい」浪のよせきて上に白くみえるものを、浪の花と古來云ひ來つて居る、偖花は木草に咲くものであるから、花といふて、草も木もの句にあやなしたであるわだつみのたつは、共に清音によむ、海と云ふ事ぢや

秋の歌合しける時よめる、　紀のよしみち

もみぢせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらむ

秋になつても、別に木の葉の色づくと云ふ事もない、あの常磐木のみ立つてをる山では時節がいつやらわかるまいが、唯風の音の何となく物悲しく聞えるので、今が秋であると云ふ事を聞きとほす事であろう」常磐山と云ふは、山城國にある名所ぢやが、こゝに云ふはその山ではない、どこに限らず紅葉せ

ぬ常磐木斗が、生茂つてある山の事、山はのぱは山にてはの意「聞きわたる」は、聞きとほす事、即ち一般に承知する事ぢや

題しらず、　よみ人しらず

霧たちて雁ぞ鳴くなるかた岡のあしたの原はもみぢしぬらん

片岡は、大和國二上山の東の方にある岡の名　あしたの原も其邊の原の名、○見渡せば、あれあのやうに霧がぼんやりと立つて、雁がサ鳴て通るは　此分でばあの片岡のあしたの原の邊は木の葉が色づいて、紅葉した事であらう」といふので、アヽ行てみやうか、といふを言外

我門のわさ田もいまだかりあげぬにまだきもみづる神なびの森

此歌普通本には、神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり、とあるが　紀氏自筆本に　我門のと書いてあるがよろしいと縣居翁はじめの説ぢや、今も此説に從ふのぢや　わさ田は早稻の田と云ふ事　神なびの

森は、大和國高市郡ぢや、○わしの門前なる早稻田の稻をも、今歳はまだかりあげもせないのに、ア、てばやく早速に紅葉して色がかはりゆく神なびの森の木の葉でもある事よ」

ちはやぶる神なび山のもみぢ葉に思ひはかけじうつろふものを

これも戀歌ぢや「ちはやぶる」は、神といはんための枕詞　神なび山は、前に申した森と同じく、大和國ぢや、○あの神なび山の紅葉ば、(誠に)うつくしう賞翫すべき色に染めた事であるが、あれには思ひをかけて、心に入れる事はせまいはてなせなれば、うつろひ變じ易く、忽ち散つてしまふものであるから、といふを、あだなる人に思ひをばかけまい、忽ち心變りして、うきめを見るべきによりて、と云ふ意によせていふたのぢや

貞觀の御時、綾綺殿のまへにうめの木ありけり、西のかたにさせりける枝の、もみぢはじめたりけるを、うへにさぶらふをの

○こどものよみけるついでによめる　藤原のかちおむ

おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

同じ一本の木の枝であるのを　あれあの樣に一方は青葉ぢやのに、他の一方は色づくと云ふやうに　木の葉が分堺のつくは、なにさま秋は西からくるといふが、其通り、西からサ、秋がはじまる事とみえるわい」「同じえを」とかゝりて、「わきてうつろふは」とうけた懸合せで　「一方は青葉なるに」といふ意がおのづとしられるのぢや、

いし山へまうでける時、おとは山のもみぢをみてよめる、　つらゆき

石山は近江國ぢや、そこへ行くには、音羽山を越ゆるぢや、

秋風の吹きにし日より音羽山みねの木末もいろづきにけり

秋風の吹くにつきて音がするといふを、音羽山にかけたぢや、○秋風が立つて

吹きはじめたりし日からして　音羽山の峰の木末どもゝだん〳〵と色が變つて色づきはじめた事ぢやわい、といふので　秋風のふきとかゝつて、音とうけ、さて木末が色づく、と結んだ風調、これらが落花流水といふべきものであらう

これさだのみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぐにそむらん

露の色は皆一樣に唯白きものぢやのを　どうしたものかして、秋の木の葉をばあのやうにこくうすく色々さまざまなる千万無量の色に染める事であらう、といふので、さてさてふしぎな事よを言外

壬生忠岑

秋の夜の露をば露とおきながらかりの涙や野べをそむらん

此歌は、草木の色の變ずるは、露がそめる由にいふが、朝起きて見れば、露は只一面に白く置いてあるといふ事を、先づ下地として、さてよんだ歌ぢや、㊀秋の夜の露が草木を染めると云ふが、さうではあるまい、露は露とそのまゝおく丈の事で、あの鳴渡る雁の涙がおちて、多分野邊の草木をばそめる事であらう、といふので、「露をば露」の語勢で、露が草木を染めるではあるまい、といふ意を言外にしらせたのぢや

題しらず、

秋の露色こと〴〵におけばこそ山の木葉のちぐさなるらめ　よみ人しらず

二の句は普通本には「いろ〳〵ことに」とあれど、古本及菅万に「色こと〴〵に」とあるがよろしい、「いろ〳〵ことに」では意味通らぬ詞であると先哲の說ぢや、今も之に從ふのぢや、〇秋の露は、唯も只一とほり白いものと思て居る事であるが、實はさうではない、色が各々別々におきわける事とサ、みえる　それ故に、露が染めると云ふあの山の木の葉が黃色も、茶色も、うす赤も、極紅の緋色もと云ふやうに　色々となるであらう、といふので　露が左樣に染める事とすれば、露の色がさやうの色でなくては叶はぬからである、といふが言外ぢや　「色こと〴〵におけばこそ」と強くいうた內に、露は白きものと思ひしが、さうでは

ない、といふ意がおのづとしられるぢや

もる山のほとりにてよめる　　つらゆき

もる山は、近江の草津から、美濃へ行く道にある山で、今守山と書いて、もりやまと云ふ處ぢやと云ふ

白露もしぐれもいたくもる山は下葉殘らずいろづきにけり

木の葉をば露や時雨が染めると云ふ事ぢやが、其露と云ひ、時雨といひ、ひどく、即ちその儘をそつくり木の間から漏ると云ふ此守山の木の葉は、上の枝ばかりではない、下葉までが色づいて、紅葉した事であるわい

秋のうたとてよめる、　　ありはらのもとかた

雨ふれど露ももらじを笠とりの山はいかでかもみぢそめけむ

此歌は笠取山と云ふ名に依つて、あやなしてよんだもので、笠取山は山城の國の山科にある山ぢや、○山の名を笠取といふからは、笠を取りかざして居る山と見える　それなら雨がふつたとて、露ほどもる事はあるまい者を、どうしてあんなに紅葉しはじめた事であらう、といふので、あやしい事よが言外

神のやしろのあたりをまかりける時に、いがきのうちのもみぢをみてよめる、　　ノ

いがきは齋垣で清淨潔白なる垣と云ふ義、神社の周圍の垣をいふぢや、

ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

「ちはやぶる」は枕詞、○あれあの通り、神のいがきに這うて居る葛は(通例の所に生じて居るものとは事かはり、神の威德もある事ならんに)しかし、それさへ一般の秋には、免れずこらへきれないで、色がかはつた事であるわい」　葛も。のも。と、「秋にはあへず」のに。はとのてには。が「ちはやぶる」の枕詞に應じて、通例の所に生じて居るものとは云々の意を、言外のづから言外に示せたのぢや　詞の組合せといふものは妙なものではありませんか、

是貞のみこの家の歌合によめる、　　たゞみね

雨ふればかさとり山のもみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞてる

此「雨ふれば」は、笠とりと云はんが爲の枕詞のやうにおいたぢや　俗其枕詞を活用して雨がふれば紅葉の色は濡れて、ます〳〵色のまさるを云うたもので ある　之を古來只枕詞の如くおいた迄ぢやといひ　袖さへぞてるは、紅葉の色のこいをいふとばかり說くは說き足らぬ事である、○雨がふれば笠をとりかざすと云ふ、其笠取山の紅葉は　雨にぬれて一層色がまさつて、往來する人の袖迄にさへ、てりかゞやく程の事である、

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた、　よみ人しらず

ちらねどもかねてぞをしきもみぢ葉は今はかぎりの色とみつれば

あゝ美しい事、此紅葉の色をみれば、今ちるといふではなけれども　前方から して惜しいと思はれる事ぢや　はてなせなれば　今ははや十分にそめ盡した至極の色で、ちるも程なからうと見る事であるからサ」といふので　今は限りの色は、十分染盡した至極の色といふに、さやうに染盡した上は、程なくちるべきであらうといふ意をふくませたのぢや、

やまとのくにゝまかりける時、さほ山に霧のたちけるをみて　きのとものり

よめる、

佐保山は、大和の國で、春日山の西にある山である、

たがための錦なればか秋霧のさほのやまべを立ちかくすらん

あゝあの佐保山の紅葉は　赤き、青き、黃色など色々さま〳〵打交つて、とんと錦のやうであるが　其錦は誰れが爲に織たもので、いか程大切にする事なればあのやうに人にみせまいとて、秋霧が立ちかくす事であらう、」といふのでさてさて意地のわるい事ぢや、を言外、

是貞のみこの家の歌合のうた、　よみ人しらず

秋霧はけさはなたちそさほ山のはゝそのもみぢよそにても見む

秋霧は、今朝は立つ事をするな、あの佐保山にむら立つてをる柞の紅葉が、今十分染盡して、まことに美事な事であるのを　此方がよそながら眺めんと思ふからサ」　此「よそながら」は、遠くより見わたして、と云ふ程の意に用ひたぢや、柞は今云ふ櫟で薄紅葉するものである

秋のうたとてよめる、　坂上是則

さほ山のはゝその色は薄けれど秋はふかくもなりにけるかな

あの佐保山に立ちてをる柞の紅葉した色は　至つて薄い事ぢやけれど、秋は最早深く成つて、近々暮れんとする時節となつた事であるわい」といふので

さて〳〵時節の經過は早い事であるを言外　すべてけるかなと云ふ辭は、前にも申す通り、重い歎息の辭である　故に此歌なども、けるかなの下に其光陰の經過する事の早い事を深く歎息する意味が、おのづからしられる事である

人のせんざいに、きくにむすびつけてうゑける、　在原業平朝臣

せんざいは、前栽の字音で、今云ふ「うゑごみ」といふ程のものぢや、庭前のうゑごみの事ぢや、　今青物類をせんざいものと云ふは、是より轉じた事ぢや、　借菊に、此歌を書いた紙を結びつけて、其菊を、人の庭前のうゑごみにうゑたのぢや、

うゑしうゑば秋なきときやさかざらん花こそちらめ根さへかれめや

「うゑしうゑば」のしは例の强めの辭で、「植ゑとし植ゑてゆく事ならば」といふ意で、菊は年々根分して植ゑかへるものぢやから、今年植かへ、來年も又植かへ、年〳〵歲々に植かへて養はゝと云意ぢや、「秋なき時や咲かざらん」面白き意回しぢや、秋がないと云ふ時節になつたならば咲くまい、と云ふのである、が　秋のないと云ふ事は千萬年の後でもない事故咲かぬといふ事も亦千萬年の後でもないと云ふ事となる、○今かやうにわしがこゝに植ゑる此菊は、　來年も植ゑかへ、來々年も又植かへ、年々歲々植ゑとし植ゑかへて行く事ならば　秋のないと云ふ時節がある事ならば、其時こそは咲かぬと云ふ事もあらうが、秋のない時節が來ぬからは、千萬年の後までも咲かぬといふ事はあるまい、して

其の咲いた花は花だから散るといふ事はあらうけれど、根までが枯れるといふ事があらうぞや、うゑとしうゑかへゆく事ならば」といふので、菊に結びつけた歌故菊と云事はいはぬのぢや

寛平の御時きくの花をよませ給うける、　としゆきの朝臣

よませ給うける」は詠ませ玉ひける」の音便で、詠ませられけるとき、詠みて奉ると云ふ事ぢや。

久方の雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

「久かたの」は雲といはん爲の枕詞、「雲のうへ」は殿上を云ふ、主上のましますを處を天に比して云ふ詞ぢや　天つ星は、天上の星といふ事、○殿上を雲の上といふ事であるが、その殿上の雲の上で見る菊は、丁度天上の星ではないかとまちがへられる事である、」と云ふで、白菊の点々咲いたさまを、星に見立てたのぢや「あやまたれ」はまちがへられとの事ぢや、さてこゝに「此歌はまだ殿上ゆるされざる時に、めしあげられてつかうまつるとなむ、」との注がある、が、これは後人の書き加へたもので、取るべきでないと先哲もいはれた。

これさだのみこの家のうたあはせの歌、　きのとものり

露ながらをりてかざゝむ菊の花おいせぬあきのひさしかるべく

これは酈縣の菊の故事を履でよんだ歌ぢや　後漢の胡廣が、酈縣の菊水を飲で百歳の壽を得たと云ひ　又酈縣甘谷の水上に菊水が有て、此水を飲む者は皆百歳餘の壽を保つなど云ふ事が、支那の書に見えて居る、それに依つていうたである　かざすとは漢字で挿頭といふ字をあてた通り、頭にさし加へる事ぢや、○露をおびたまゝそつくり折りとつて頭にかざす事としやう　この菊の花をば、さうしたならば、かの百餘歳の壽命をも保つて、老いくづほれぬ秋を長久にうけ得らるゝであらうから」

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、　大江千里

うゑしとき花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し

春根分けをした時分には、早く花がさく時節にしたいものぢやと　一向に花の咲くのが待遠に感せられた菊の花よ　アア、其時分には、かやうに花の盛りが過ぎて　色の變つてしまふ、此やうなさまを見やうと思うたかい、全く少しも思はなんだ」といふので　さて〳〵あはれなさまである、を言外。

おなじ御時せられける菊合に、すはまをつくりて菊の花植ゑたりけるに、くはへたりける歌、ふきあげのはまのかたに菊をうゑたりけるをよめる、

すがはらの朝臣

「すはま」は洲濱の形に作りたる臺の名、今云ふ島臺のやうなものぢや、くはへたりける歌」は歌にの意吹上の濱は、紀伊國の名所ぢや。

秋風の吹上にたてるあらぎくは花かあらぬか波のよるか

吹上の濱と云ふ名に依つて、秋風の吹くといひかけたのぢや、さて波のよするとあやなしたのぢや、○秋風が吹上げるといふ吹上の濱に立つてをる白菊の花は、あれは花であるか　いや〳〵花ではあるまいか　秋風に吹上げられて

よせきた波であるか、どうも波のやうにみえるといふが言外。

○仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる、

素性法師

これより下の「大澤の池云々」までは、上と同じときの歌ぢや、仙宮は仙人の住して居る宮殿をいふ。

○ぬれてほす山路のきくの露のまにいつかちとせを我は經にけむ

支那の王質と云ふ人が、薪をこらんが爲に山深く入りつるに　人が碁をうつて居たから、傍でそれを見て居た内に　斧の柄が朽ちたから、驚いて家に歸つて見れば、世代がしばしば代りて、七代の子孫であつた　碁をうつた人は仙人であつた、といふ事がある　此歌はそれらを思うて詠んだもので「ぬれてほす」は山路を分けるとて菊の露でぬらした衣を云ふ　衣とも袖とも云はないで自然さやうに聞ゆる處が妙だと古來からいふ事である「つゆのまに」は烏

渡の間にといふを、露にかけて云ふ、すべて極すこしといふ事をつゆと云ふ、毫の字の意ぢや、○山路を分けるとて、其路に咲いて居る菊の露で着物がぬれたをほす間の、極めてちよつとの隙に　いつのまにやら早千年の長い月日の程を、わしは過したことであつたらう、といふので　此仙人の住處に來たからは、を言外

菊の花のもとにて人の人まてるかたをよめる、

ともの り

もとは傍といふ事ぢや。

花見つゝひとまつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

これは晉の陶淵明が、九月九日に酒がなくて徒然に堪へず、籬の菊を摘んで盃に盛つてをる折柄　白い衣を着た人が來るを見れば、江州の大守王弘が酒を贈りこした使であつたから、淵明は大に悅で、白衣來といふ詩を作つたと云ふ事を履でよんだ歌ぢや、○菊の花を見ながら來るべき人を今か今かと待つて居るときは　其花の白いのが我が待つてをる人の袖かとばかりまちがへられてアヽ、きたさうぢやと思はれるわい、これも菊と云ふ事を省いたである。

おほざはの池のかたに、菊植ゑたりけるをよめる、

大澤池は、山城の嵯峨野にある池ぢや、

ひともとゝ思ひし花をおほざはの池のそこにもたれかうゑけむ

唯一本ぢやと思うた菊の花を、オヤ〳〵　此大澤の池の底にも亦同じさまに誰がマア、植ゑた事であらう、といふので　あゝふしぎの事ぢやを、言外　これも菊を省いたのぢや。

世の中のはかなきことをおもひけるをりに、菊のはなをみてよめる、

つらゆき

はかなき事とは、即ち今日ありて明日なき無常の事を云ふ。

秋のきく匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきとゑらぬわが身を

「かざしてむ」の句におのづから樂しみあそぶ意を含めたのぢや○秋さく此菊の花の匂うて美しく咲いて居る程は、それを折りかざして愉快に面白く遊ぶやうにしやう、(人間の世は無常のものぢや、今はかうしてあれども、)あの花よりさきに死ぬといふ事があらうもしれぬわしが身ぢやに依て「かざしてむ」といひすゑて、「花よりさきと」とうけた懸合せの上に　人の世はたのみがたいものといふ意がおのづからあらはられるぢや。

しらぎくの花をよめる、　凡河内のみつね

心あてにをらばやをらん初霜のおきまどはせるあらぎくの花

「心あてに」は今いふ「あて推量に」といふ事「をらばやをらん」は「折る事ならば折る事とせん」といふので　即ち「もし折ると云ふ事ならば、あて推量で折る事とせん」と云ふのぢや、○あゝ白菊の花には多く霜のおいた事ぢや　さればもしあの枝を折らんとする事ならば、あて推量にこれぢやらうときめて、折る事とする外はあるまい　あのやうに初霜が澤山おいて、どれが花だか葉だかとんとわからず、おき惑はしたる白菊の花はサ、

これさだのみこの家の歌合の歌、　よみ人しらず

色かはる秋の菊をば一とせにふたゝびにほふ花とこそ見れ

昔は菊花は主に白菊を賞翫したものである　さて白菊は盛を過ぎると赤みを帶びる事で、之れをうつろふ色を云うて、又賞した事である　此歌に色かはると云ふも、此うつろふ色の事である、○最前さいた色とは、特別に變つて見えるあの菊の花をば、(同一種の花とは見うけられぬ)一年の間に二度咲きかへて句ふ花ぢやと見られる事である、をばとかゝりて、一とせにとうけた語勢で、同じ花とはみられぬといふ程の意がしられるぢや。

仁和寺に菊の花めしける時に、歌そへて奉れとおほせられければ、よみてたてまつりける、　平のさだぶみ

仁和寺は光孝天皇の仁和四年中　京の西山に伽藍を建設せられ、之を仁和寺と名づけられた　其後延喜元年宇多上皇御室をこゝに設けさせ玉うたので、此菊の花をめされたも宇多上皇が召されたのぢや。

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつらふからに色のまされば

こゝに云ふ秋は、菊の花の當然の盛を云ひ　時と云ふは變色の盛なる時を云ふぢや、○菊の花は、當然の盛のときの外に、又更に二度目の盛の時がある事でござります　と申すは一旦變色してうつろひますについて、又更に色がまさつて美しく見える故でござります　惶き事ながら　陛下にも御讓位の後、今日かやうに盛んに渡らせらるゝは、丁度此花のやうな事と存じ奉ります。

人の家なりける菊を、うつし植ゑたりけるをよめる、

つらゆき

ときそめしやどしかはればきくの花色さへにこそうつろひにけれ

うつろふは、うつると同じて、前に申した通り何物何事によらず、すべてこれが彼にかはり變ずる事　色に言ふも、此色が彼色にかはり變ずるのぢや　家にいふも、此家より彼家にかはり變ずるぢや　それ故今此歌では、家のかはつた事を、色のかはるにかけていうた事である、○此菊は最前咲初めた宿がサ、變つて、此宿に植ゑかへてからは　菊の場所ばかりでなく、其色までさへもサ、かはり變じた事ぢやわい。

題しらず、

よみ人しらず

さほ山のはゝそのもみぢ散ぬべみよるさへみよとてらすつきかげ

「ちりぬべみ」のべみはべくしての意で、散りさうなあんばいに見えるを云ふぢや、○あれあの佐保山の添蓋した柞の紅葉は　もはや、やがてちりさうなあんばいに見えるからして　之を賞翫する者は、昼の間ばかりでなく、夜になつても見るがよいと注意して、照す事であるか、―あの月影は」といふので、月の清い事を言外に示したのぢや。

宮づかへひさしうつかふまつらで、山ざとにこもり侍りける

藤原關雄

によめる、

「宮づかへ」は奉仕といふ事ぢや「久しう仕うまつらで」は年來官職を得ぬと云ふ事ぢや、官職がない故に山家に引籠んで居つたのぢや。

おく山の岩がきもみぢちりぬべし照日のひかりみるときなくて

岩垣紅葉は　岩垣沼　岩垣清水　など云ふ岩垣で　岩が垣の樣にめぐつて居る、其片陰の紅葉と云ふ事ぢや　かきはかぎろふの意で直ちに陰といふ事ぢやと云ふ說は非である　と云ふは此岩垣といふ詞は、古來多くかきこもる意に寓せて云うてある、此歌も亦其意である、○世に疎い奧山の、しかも岩が垣のやうに圍んでをる片陰の紅葉は　折角色よく染めたかひもなく、空して散つてしまう事であるが、かやうな片陰だから大空に照りかゞやく日の光を見ると云ふことも、なくてサ、」といふので　ア、殘念の事ぢやといふを言外ぢや　關雄は才學が有て、書をも善く書いた人ぢや　然るに世に用ひられないで、奉職もせんで引籠んで居るのを歎いて、紅葉によせて自身の事を云うたものぢや。

題しらず、　よみ人しらず

龍田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなん

立田川は大和の名所ぢや、○あの立田川は、こいや薄いやさまぐの色の紅葉がちり浮んで、盛んに流れるあんばいぢや　からしてあの川を今渡る事であらうならば、きれいうるはしい錦のまん中が、きれてたえる事であらう」といふので　それ故どうも渡りかねるが言外

此歌はある人ならのみかどの御歌なりとなん申す、

ならのみかど、此ことは前に申した、こゝにいふは平城天皇を申すであらう

偖此注は後人の書加へたるならんと打聞にはあるが　序中に「立田川に流る、紅葉をば、帝のおほんめには錦と見玉ひ」とあるは、此歌をさしたものぢやから疑ふべきに非ず、と正義にあるがよろしい。

たつ田河もみぢば流る神なびの三室の山に時雨ふるらし

又はあすか川もみち葉ながる

三室山は大和にある　立田川は常に水が至つて少く、又は涸れて、雨がふれば俄に水の出る川で俗に云ふ一時川といふものぢや、○あれあのやうに、立田川に水がまして、紅葉の葉が盛んに流れてくる事よ　してみれば水上の神並にある三室山に時雨がふつた事であるらしい。

戀しくば見てもゐのばん紅葉ばを吹きなちらしそ山おろしの風

三の句の「紅葉ばを」は落葉の紅葉をさしていふのである、○後日紅葉が戀しく思はんときには、落葉した紅葉を見てなりとも、その形見としやうものを　されば、その散つた紅葉を、せめては吹きちらさないで　その儘そつくりとして、おいてくれよ、これ山おろしの風よ　山おろしの風は、風力のつよいものにいふものぢや。

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへさだめぬ我ぞ悲しき

是は紅葉によせて、自分の身のよすがゝ定らぬ事を歎じた歌で　「もみぢ葉の」のは「の如くの」で　「よしの川岩波高く行水の早く」、「夕月夜さすや岡べの松の葉のいつともわかぬ」のと同じである、○秋風が吹來るに、たへきれないで散つてしまふ紅葉のはのやうに　あちらこちらへさすらへさそはれて、どこへおちつくといふ目途もなく、流浪する此方の身分はサ、まことにかなしくなさけない事ぢや。

秋は來ぬ紅葉はやどに、ふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

此歌は先づ初句の「秋は來ぬ」といふのに目を注けべきぢや　秋が來たといふではない秋が來てしまうたといふので、秋がふけた事をいふのぢや、○秋は十分に深くなつた、紅葉はすでに散つて庭一ぱいに積り去いてしまうた　其散りしいた道を踏分けて、問うて、來るものは唯の一人もない、とかう並べたつていひすてた言外に　さて〳〵淋しく侘しい事ぢや、と云事が自然しられるので、こゝが面白いのぢや　こゝらの味は話しても話し盡されない、唯吟誦して自然に心得るより外はない　去かし、秋は」といつて來ぬ」とうけ　紅葉は」といい

つて、ふりしきぬ」とうけ　人は「といつて、なしとうけた、此三つのは　二つのぬ。
一つのなしに目を注けて味つてみると、誰にも其味は大かたわかるべきぢ
や　これらの歌のかけあはせをよく心得ておくと、歌をよむ上について大層
益がある。

ふみわけてさらにやとはん紅葉ばのふりかくしてし道とみな
がら

さあ〳〵踏分けて、しひて殊更に問うて見やう　あのやうに紅葉の葉がうづ
高く散つて、人が尋ねて來ぬやうに埋み陰してある道と見ることであれど」と
いふで、どうも床しく思はるゝからが、言外ぢや　紅葉がちりつもつて、道もな
き迄の家を、よそめからゆかしくみてよんだものぢや。

秋の月山べさやかにてらせるは落つるもみぢのかずを見よと
か

秋の夜の月が、あれあのやうに山の邊をさやかに明かに隈なく照らすのは、

落ち散る紅葉の數がいくつと云ふまでをも見て、せめてはをしむ心をなぐさ
むるやうにとの事なるか、」といふので　さても〳〵清く明かなる影であると
いふを言外。

吹風の色のちぐさに見えつるは秋の木葉のちればなりけり

「ちぐさ」は千種で、種々さまざま、即ち色々と云ふ、事ぢや、○吹く風には、色はない
ものぢやと思うて居つた事ぢやのに　さうでなく、赤く、黄いろく、其他色々さ
まざまに見えるは、ふしぎな事ぢやと思うたところが　あれは秋の木の葉の
いろ〳〵に染めたのが、ちるからの事であつた　此歌紀氏自筆本と云ふには、
二の句が「ちぐさの色に」とあると云ふ、いづれにしても意はちがはぬ事ぢや。

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦の織ればかつちる

機の糸は堅を經と云ひ、横を緯と云ふ　此歌紅葉を錦に見立てゝ云ふからし
て、紅葉は露霜が染めると云ふより「霜のたて露のぬき」と文なしたぢや○織地

とする霜の經糸や、露の緯糸がサ、弱いらしい　あの山の錦は、今織りだしたかと見る程もなく、はや一方からはちり始める事ぢや、といふので　且は、すべて物の兩端にかゝる一方にいふ辭で、前に申す通り且よろこび、且憂ひだの、且歌ひ且舞ふ　の類皆一方にはと云ふ意ぢや、

うりんゐんの木の蔭にたゝずみて、　僧正遍昭

わび人のわきて立よる木の本はたのむかげなく紅葉散りけり

此歌に付ては、端書の雲林院と云ふに目を注けて見るべきぢや「わび人」は、すべて時世などに入れられないで、志を得ぬ人の事を云ふ　即ち不遇不幸の人と云ふ位の事ぢや　遍昭は雲林院の住職で、朝廷の待遇も重かつた人ぢやが是は其住職上の事で、何か不滿の事があつて、我が力とする人が死去したか又は盡力せぬか等の事が有つて紅葉によせてよんだものとみえる、「頼むかげなく」は、頼む木陰に雨もると云ふ諺の意ぢやといふ〇不幸の人が殊更に目をつけて立よる所の木の下かけば　ア、それがわび人の所以である事か頼むかげもなく、紅葉もちつてしまうた事であるわいといふので　さて〳〵せん方もない事ぢやが、言外此解は正義の説がよろしい。

二條の后の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に立田川にもみぢ流れたるかたかけるを題にてよめる　素性法師

「春宮の御息所」と申す事は前にもちよつと申したが、春宮の御母御息所と申す事で、春宮の妃と申す事ではない、二條の后は陽成天皇の御母高子と申した御方である。

もみぢばの流れてとまるみなとにはくれなゐふかき波やたつらん

ア、きれいに流れてゆく紅葉である事よ　かやうに流れてゆく立田川の紅葉が段々と流れていつて、集まり留まる湊の邊には、紅色の極ふかい、即ち眞赤な浪が立つ事であらう、といふので　いかにきれいの事であらう、が言外、

ちはやぶる神代もきかず立田川から紅に水くゝるとは

「ちはやぶる」は神といふにかゝる枕詞「水くゝる」は水をくゝり染にするといふ事で　くゝり染は、纈纈と書いて、今云ふくゝしである　くゝりぞめは古くより行はれたもので、令式などにも纈纈といふ字がみえてをる、〇種々樣々奇妙不測珍しい事が澤山有つた神代の時代の話にも、まだ一向に聞いた事がないといふは、今此立田川のやうにからくれなゐ、即ち極紅の色に水をくゝり染にするといふ事は」といふので　さても〳〵怪しく不測な事ぢや、といふを言外にしたのぢや　紅葉といふ事をいはず、只水を紅にくゝり染にしたといひなしたのが面白いのぢや　立田川に紅葉の流れてをる屏風繪のさまは、げに水を纈纈染にしたやうにもみえるであらう、そこらも考へて味ふべきぢや。

これさだのみこの家の歌合のうた、　敏行朝臣

我來つるかたもあられずくらぶ山木々のこのはの散りとまがふに

「散りとまがふに」は散りと散りまがふ事ゆゑ、といふ意で　其散るさまの甚しいのを言ふ詞　塵をかけて云ふ意ではない、くらぶ山に暗き意を匂はせたのぢや、〇わしが分けてたどり來た方角も、どうであつたか、とんと分別ができんはてくらぶ山のくらく生茂つて居る山道で、木々の木の葉がいづれも盛んにちりとちりまがひ亂るゝからにサ」

神なびの三室の山を秋ゆけばにしきたちきるこゝちこそすれ　たゝみね

神並なる三室山を、秋の時分に分けて行くときは、こいやうすいやさまゞに染めた紅葉の中を、かき分けて行く事であるから　丁度錦を裁ち斷るやうな心もちがする事よ」と云ふので、面白い云ひまはしである　之を錦を裁て着ると解た說もあるが、さう說いてはとんと面白くなく、尋常のものとなるのぢや紅葉の中を越えてゆくが錦を裁切るので、その言回しが面白いのぢや、裁斷るの句は秋行けばの句に應ずるのぢや、

きた山にもみぢを、をしむとてまかれりける時によめる、

普通本にはをらむとあるが、をしむとある本がよろしい、をしむは愛むぢや。

見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜のにしきなりけり

よるのにしきは、漢の朱買臣が、富貴にして故郷に歸らざるは綉衣を着て夜行くが如し」といふたに依る語ぢや、○誰一人賞翫する人もなくて、徒らに染め、徒らにちつてしまふ此山の奥の紅葉は　錦を着て夜る行くととんとかはりがない事ぢや、わい」といふので、アヽをしいものぢや、が言外、

秋の歌とてよめる、　かねみの王

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

立田姫は、秋を司る神の名ぢや　佐保姫を春を司る神とし、立田姫を秋を司る神とする事は　もと奈良の京から起つた事で　奈良の京より、佐保は東の方にあたつて、東は春の方角であるから、佐保彦佐保姫を春の神とし　立田は西に當り、西は秋の方角ぢやから、立田彦、立田姫を秋の神としたのぢや　手向くといふは、神佛に物を供へること　幣は神に奉るもの　こゝでいふは青いや赤いや其外色々に染た麻の類を細かに切て奉るものをいふのぢや、○立田姫は秋の神ぢやが、其神が又外に供へものをする神があることゝ考へられるサぢやから其そめた秋の木の葉の、赤いや黄色やいろ〳〵のを、ぬさと散らして奉る事だらう、」

をのといふ所に住み侍りける時紅葉を見てよめる　つらゆき

小野は、平安京の北にある山里である

秋の山紅葉をぬさとたむくれはすむ我さへぞ旅ごゝちする

昔は旅行には、ところ〳〵で道祖神に幣をたむけたものである　山を越えるときは、其高い處でぬさを手向けた事ぢや　夫故峠の名はおこつた、たうげはたむけぢや、○秋の山ではあのやうに紅葉がちる事で、とんと旅人がぬさをたむけるやうにみえる　からして之を見るときは、平常かやうに住居してをる

我等までがサ、旅をするやうな氣もちがするよ。

神なびの山をこえて、立田川をわたりける時に、もみぢ葉の流れけるをよめる　清原深養父

神なびの山を過ぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

秋は西から來り、又西にかへると云へば　立田川を渡つて神並山にかゝるものとしてよんだものぢや、〇これから神並山を越えて歸り去るべき秋であるからして　それがために此の如く立田川にぬさを流して、手向をする事とみえる、といふで、アヽ秋もいよ〳〵終となつた、といふが言外、

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、　藤原のおき風

白浪に秋の木葉のうかべるをあまの流せる舟かとぞ見る、

是は川なり、池なり、すべて水の上に落散つた紅葉が　波にゆられゆられる樣を蜑小舟が、大海に漂流せるさまに見立てゝよんだものぢや、〇よせくる白波に、ちつた木の葉が浮いて、ゆられ〳〵するありさまは　とんと蜑が漂流して、よるべき磯もなく、沖中に漂ふ舟のやうに見ゆる事ぢや、

たつた河のほとりにてよめる、　坂上是則

もみぢ葉のながれざりせば龍田川水の秋をば誰かあらまし

水は秋ぢやといつて別に色の變るものではない　それ故もし紅葉がちつて流れると云ふ事がないであつたならば　此立田川の水が、秋ぢやといふ事を、誰がしらう事ぞ、といふで　してみれば紅葉は水をまでも秋ならしむるものであるといふが言外、

志賀の山越にてよめる、　春道列樹

山がはに風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

山がはの、かは濁りてよむ、山に流るゝ川と云ふ事故ぢや　清みてよむときは山と川との二つとなるぢや、〇川には、しがらみをかけて水を塞くものぢやが　今此山の川に風が持つてきてかけたとみえる柵は、きびしう嵐が吹きかけて、流れきれない紅葉であつたわい。

池のほとりにて紅葉のちるをよめる、　　みつね

風ふけばおつる紅葉ば水きよみちらぬかげさへ底に見えつゝ

風が吹くにつけて、岸の紅葉の葉は、はやちらほらとちりかけたが　其ちる紅葉は水の底に沈むは勿論ぢやが　水が至て清淨にすんで居るから、まだ散らない紅葉のかげまでも、底に見えつ見えつして、とんとちつたものゝやうに見える事ぢや、

亭子院の御屏風の繪に、河わたらむとする人の、もみぢのちる木のもとに、馬をひかへて立てるを、よませたまひければ、つかうまつれる、

つかうまつれるは、即ちよむで奉つたのぢや、

立どまり見てをわたらむ紅葉ばは雨とふるとも水はまさらじ

ア、きれいな事、マアゆつくり立止りて、十分見てサ、その後渡るといふ事としやう　雨がふれば水がますものぢやから、川は渡られぬ事となるものである

が　紅葉は何程雨のやうにふつたとて、水はますと云ふ事はあるまいからして、」といふで　心配なく心しづかにみんを言外、「みてを」のをは例の歎辭の重いものである

是貞のみこの家の歌合のうた、　　だゝみね

山田もる秋のかりほにたく露はいなにふせ鳥の涙なるべし

稻のみいりした時分、山田の番をする番小屋には、澤山な露がおく事であるが之は此頃毎日々々しげく此山田へ來て鳴く稻負鳥の涙であらうと思はれる

題しらず、　　よみ人しらず

ほにも出でぬ山田をもるとふぢ衣稻葉の露にぬれぬ日はなし

五の句古本に「夜はなし」とあるがよいと古人もいうた　「ふぢ衣は藤葛にて織つた粗服で、下賤の者が着るきものぢや　喪服に云ふも、もと喪中には粗服をきるから起つた事である、○まだほにも出ない程からして、山田の稻の番をす

るとて　わしは山田の番小屋にねる事であるが、それ故わしが着てをる藤で織たきものは　稲葉の露で毎晩々々ぬれないと云ふ事はない、」といふので

さて〳〵農夫と云ふ者は難義なものぢや、が言外

かれる田におふるひつちの穂に出ぬは世を今さらに秋はてぬとか

ひつちは、一度刈つた稲のあとから、復び葉が生ずるものをさして云ふ名ぢや、秋の終るに飽はてをかねたである、○刈取つてしまうた田の稲の、刈取たあとに復び生じ出たひつちが　又と穂に出て實を結ばぬといふのは、此世の中を今更にいやに思ひこんでの事であるか、」といふで　實にさうであらう、秋もくれてゆく事ぢやに依て、が言外

北山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる、

そせいほふし

古本に僧正遍昭との五字なきがあり、之に從ふべしと古人の説ぢや

もみぢ葉は袖にこきれてもていなむ秋をかぎりと見む人のため

「もみち葉」のはをばの意のはぢや、「こきれて」は、こき入れてぢや、○ア、きれいな紅葉ぢや、これをば袂にこき入れて、内へ土産に持つて歸る事としやう

秋はモウしまひぢや　紅葉なども　モウない事と思うてをる人に見せむがためにサ、」

寛平の御時、古き歌奉れとおほせられければ、立田川紅葉ばながると云歌を書きて、そのおなじこゝろをよめりける、

おきかぜ

立田川紅葉ばながる神並の三室の山に時雨ふるらし、上にみえたり

み山より落くる水の色みてぞ秋はかぎりとおもひしりぬる

深山には、猶ちり殘つて居る紅葉もあらうかと思うて居たが　今此深山から流れ落下りくる水の色が、あのやうに赤いのを見れば、紅葉がちつて流れくる

事がしられる　してみれば山中にももはや紅葉はなく、どこもかしこも秋は盡きてしまうた事と合點せられる事ぢや、

秋のはつるこゝろを、立田川に思ひやりてよめる、

つらゆき

暮秋にあたつての感情が立田川に動いたのぢや、即ち暮秋に立田川はどんなであらうとおもふのである。

としごとにもみぢ葉流す立田河みなとや秋のとまりなるらむ

年々歳々に紅葉ばを流して、海に送りやる立田川のさまは、今年も亦同樣のけしきであらう　してみれば湊といふものは、舟の泊るとまりどころであるが　秋のとまりもやつぱり湊で、秋は皆湊に泊つてをるであらう、といふので、そんなら秋を尋ねて湊へいつてみやうか、が言外。

ながつきの月のつごもりの日、大井にてよめる、

夕づく夜をぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

「夕づく夜はをぐらにかゝる枕詞○アヽ、今日は九月晦日で、秋のくれてゆく日ぢやが　モウ日ぐれになつて小倉山もくれはじめて、暗くなつてきたが　その山でなく鹿の聲は昨日のやうに相かはらず聞えるけれど　そのなく聲のうちからして秋はくれてゆく事であらう」といふので　「夕つくよ」は枕詞ぢやが此句で一層淋しいけしきをそへて、打吟ずるまゝに實景に向ふやうな氣もちがするのぢや

おなじつごもりの日よめる、

みつね

道しらばたづねもゆかんもみぢばをぬさとたむけて秋はいぬめり

ゆくての道が分つて居る事ならば、跡を慕うて尋ねてもゆかんものを　あれあのやうに秋は紅葉を以て　道祖神への幣として供へ奉りて、いつてしまうあんばいぢやといふので　どうもその道が分らないからしかたがない、か言外。

古今集詳解秋下卷之五 終

古今和歌集卷第六

冬歌

題しらず、　　よみ人しらず

龍田川にしきおりかく神な月しぐれの雨をたてぬきにして

「おりかく」は織りて懸渡すこと　即ち川一ぱいに紅葉がうかぶを、いふ　これをかくは輕く添へて言つたばかりで、織るといふ意ぢやと云ふ説はよくない、神無月は舊曆十月の異名「たてぬき」は時雨で紅葉し、時雨で散るといふをあやなしていふと云ふ説は、あまりゐぐりすきた説ぢや　只時雨の雨の糸を經緯にして、といふで、經緯に降る時雨に散つたをいふものと見るべきぢや、○あれあの立田川を見れば、錦を織出して、川一ぱいにかけてあるが　其錦は神無月即ち十月の時雨の雨を經緯の糸にして織たものぢや」　さて此歌は紅葉とも落葉ともいはないが、自然散りういて居る紅葉と聞えるが妙なのである　さて又此歌六帖、幷に新撰和歌集等には初句「立田山」とあるが　此歌はこゝで

は落葉で冬の歌ぢやが、山といふ時は紅葉の事となつて、時雨の雨をたてぬきといふも　時雨が紅葉を染める事となり、時雨の雨の糸が經緯となつて、錦を織つたといふ事で秋の歌となるのぢや　川と山と一字の相違でかやうに意味が大層なちがひとなる、妙なものではありませんか

冬のうたとてよめる、　源宗于朝臣

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

離れ遠ざかる事を古くかると云ふと云ふ事は、前にも申したそれを此うたでは人目と草とにかけて云うたのである。○山家と云ふものは、いつもさびしいものではあるが　しかし冬は格別その淋しさがまさる事である　と云ふものは、是までは、たまには人の尋ねてくる事もあり　又草木も花や葉があつて景色も何となく賑やかで有つたが　今は人目も、又草木も皆枯れてしまうた事であるから」といふので　草も枯るとは、草木すべて枯れしぼむ事を云ふ又「かれぬと思へば」は只かれぬればといふまでの意ぢやと遠鏡にある通りぢや

題しらず、　よみ人しらず

おほ空の月の光し寒(清)ければ影みし水ぞ先こほりける

天空に澄み渡つた月の光がサ、いかにもすごく寒く見えた事であつたが　それ故その月の影をうつして、昨夜賞翫した水はサ　今朝見れば先づ第一番に氷つた事であるわい」と云ふで、寒月のさまをよく云うた歌ぢや　「影みし水」と過去にいふたので、昨夜月がうつつた水の、今朝氷つたといふがしられるぢやこれを夏秋の頃影をうつしたと説くはよくない　こゝは初冬の事で朝氷の事をいうたものである　偖三の句普通本には「清ければ」とあるが、これは古本六帖又朗詠などに「寒ければ」とあつて、その方がよろしい由は古人皆いひおかれたである。

夕されば衣手さむしみよしの丶吉野(高木)の山にみ雪ふるらし

「衣手さむし」は袖寒し、袂寒しも　など云ふと同じで、袖口即ち手先の冷える事、時候の寒い事を云ふのぢや　「よしのの山」　或は「高木の山」とかいた本もある、

いづれでもよいが、調の上では、よしの〻と重ねていふがまさるやうぢや　○夕ぐれとなるにつれて、袖口がひや〳〵して、手先がきつう冷える　此分では　あのみよしのの、吉野の山には定めてみゆきがふる事であらう、と云ふで　まことに作らず、かざらず、ありのまゝをよんだ歌だが　さて感情がどうも深くて實地の景が一吟の下に動く歌ぢや　みよしの〻よしのの山とかさねた調で、何となく此分ではと、そのかたをはるかに深くおもひやりたるさまがしられるぢや。

今よりはつぎてふらなん我やどのすゝきおしなみふれるあら
ゆき

「つぎてふらなん」の、つぎては繼ぎて〻引續きてと云ふ事　ふらなんは、ふれよかしと願ふ意、ふりなんといふとは差別がある　初學は、とかく此差別を誤るからお話申しておく、おしなみは、押靡かす事、○今日からは引續きて降るやうにしたいものである　あれあのやうに、わしのうちの庭のすゝきを押なびかして、いかにも面白い風景とした此白雪はサ、と云ふので　かういうた餘情に、

雪が十分にもふらないで、僅にすゝきに殘つたのみでやんだ、といふさまがしられて面白いのぢや。

ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたきつせおとまさるなり

これは山中に住む人がよんだ歌で、○今日ふる雪は、まだつもるといふ處へいかないで、一方からしてサ、やがてとけてゆく事らしい　あれあの山からしてたぎり流れてゆく山川の水音が、きつう高く聞えてきた事ぢや、」かつは一方と云ふ事は已に申した　たきつせはたぎりながるゝ山川の事を云ふのぢやはじめにふる雪はつもらないで、ふるに隨つて消えるものぢや、それをよんだのである　足引のと枕詞をおいてのどめたところに、深く心をこめて思ひやつた情が何となくしられるのぢや。

この川にもみぢばながるおく山の雪げの水ぞいままさるらし

ア、此川に、今俄に紅葉が流れ出して來た　これで考へてみれば、此水上なる奥山の雪どけの水がサ、只今增つて紅葉ぐるめに山川へ押しこんできた事らしい」「ゆきげ」はゆききえて即ち雪どけと云ふ事ぢや。

ふるさとはよしの丶山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし

こゝに云ふ「ふるさと」は、古都をさして云ふぢやらう、飛鳥か豐浦などであらうと古人もいひおかれた、○我が住居してをるこの故郷は、吉野といふ高山がサ、ぢき近くにある事ぢやに依て　毎日々々雪がふりつゞいて、一日もふらぬと云ふ事はない、」と云ふで　ありのまゝによんだところに、何となく實景實情があふれて、感が深い歌である。

我やどは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

「ふりしき」は「降り敷き」で、一面に雪が降り敷き積つたを云ふ、○わしが家の庭には、一面に雪がふりしき積つて、通路もない事となつた　之をふみ分けて尋ねてくる人がサ、ない故に、」といふので　言外に、アゝこの雪に人にとはれて話したならば、面白い事であらうのに、といふやうな意が表られるぢや。

冬のうたとてよめる、

紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲きける

「冬ごもり」は、もと春と云ふにかゝる枕詞で、草木の芽が冬はこもり居て、春に發るとかゝる詞である　それを此歌では、やがて芽の間にこもりてまだ發せぬを云ふ一つの名詞に用ひたのである、「春にしられぬ花」とは即ち春が知らぬ花と云ふ事で、春が咲かせるでない花と云ふのぢや、○總體花といふものは、春になつて木草の芽がでゝからでなくては咲かぬものぢやのに　雪がふればまだ冬であつて、芽出しをせぬ草でも木でも　皆殘らず春に知られたでない、春が咲かせるでない、花がサ、總體に咲く事である」と云ふので　この歌は雪がふれば木草が花の咲いたやうにみえると云ふ事を云回しを面白くいうたのである

志賀の山ごえにてよめる、

紀のあきみね

白雪の所もわかずふりしけばいはほにもさく花とこそみれ

此歌、詞書と照らして見るべしぢや、志賀の山越で雪中見渡した景色ぢや、○ア

、こゝからして見渡せば雪がどこもかしこもさりきらひなく一面に降りしき積つた事ぢやから　木や草は勿論の事で　花の咲くといふ事は決してないゝはほにさへも、咲いた花のやうにみえる」といふので、さて〳〵　面白い景色ぢや、が言外

ならの京にまかれりける時にやどれりける所にてよめる、

坂上これのり

「やどれりける所」とは、奈良をいふぢやらう、歌に「ふるさと」とあるに依てゞある、

みよしの、山のあら雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり

ア、あの三吉野の山には、はや雪がつもる事らしく思はれる　此ふる里の寒氣がよほど強く感せられる事ぢやから、」と云ふので　これも思ふまゝを、さら〳〵と云うたうちに、云盡されぬ感情がある　つまり上の句と下の句とのかけ合せを大拍子にゆつたりというたところがおもしろいのぢや。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、ふぢはらのおきかぜ

浦ちかくふりくる雪は白波の末の松やまこすかとぞみる

末の松山」は奥州の名所で、海邊にある山の名ぢや　此山は高い山ぢやから、どのやうに浪が高くても、此山を打こす事はない故、「君をおきてあだし心を我もたば、末の松山波もこえなん」など云ふ歌もあつて　松山を波のこすといふはあるべからざるためしにいはれてをる事である　此歌はそれに依つて雪の沖の方からふりくるさまを、浪がよせきて末の松山を越さうとするさまに見立てたのである、○沖の方から海岸近く眞つ白に漲つて、今しも降り來る雪の景色を、遙かに望み見れば　丁度あの聞き及んでをる高波が、末の松山を打こさんとて、逆卷き來るものゝやうに見うけられる事よ、」といふで　末の句の「見る」を「見ゆ」とある本がよいといふ說があるが、それはよくない　これはどうしても「見る」となくてはならぬ處ぢや　又見ゆではその結もとゝのはぬものとなる事ぢや、

みよしの、山の白雪ふみ分けて入にし人のおとづれもせぬ

壬生忠岑

此時代は、世を遁れ隠れる人は、多く吉野山に分入つた事であるから、それを思はせて、よんだものである　或説に歌合の歌めかぬと云ふは誤の説ぢや、○あの三吉野の山にふり積つてをる雪を、ふみ分けて入つた人は、その後なんとの音信もない事である　アヽどうしてあるか、といふので　さぞ寒氣が強い事であらうが、無事でをる事か、煩らひでもしてをる事か、アヽとんと様子がわからぬ、といふを言外にしたものぢや、

白雪の降りてつもれる山里はすむ人さへやおもひきゆらん

「おもひきゆ」は、心のひき入れられて、死ぬばかり侘しく淋しく感ぜられる事それを雪の縁語にしたのぢや　さてこれは雪の深い山中に住む人を思ひやつてよんだ歌ぢや、○雪がふつて、つもり〳〵て道もたえる程の山中では、雪はとけるものぢやが　雪ばかりでなく、そこに住むで居る人までさへも、思ひ消えて死ぬばかり侘しく淋しく感ぜられる事であらう、

雪のふるをみてよめる、　凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん

此歌も詞書に目をつけて見ねばならぬ　物思のあるとき雪の降るを見て、やがて自身の物思を雪によそへてよんだものぢや、「道なれや」は道なればにや、といふ意、「あとはか」の「はか」は「そこはか」「いづこをはか」などいふはかで量の義「あとはかもなく」は跡の尋ねかたもないと云ふ意ぢや、○アア我が物思ひは丁度あれあのやうに雪がふつて、人もとんと往來せぬ道なればにやあらん　其跡形をどうと尋ねかたもなく、只むさと死ぬほどに侘しく、つまらなく感ぜらるゝばかりぢや、といふので、これも思ひきゆるを雪の縁語に取つたのぢや、

雪のふりけるをよみける、　きよはらのふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

まだ冬でありながら、あれあのとほり天空からちら〳〵と花が散つてくるのは　思ふにあの雪よりあちらの方は、已に春で花がちる故の事でもあらうかしらん、と云ふので　是も雪といはないで雪ときかせたのぢや　それ故詞書に雪といふ事をいうたのぢや、

ゆきの木にふりかゝれりけるをよめる、　つらゆき

冬ごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞ降りける

冬ごもりは前にいうた通り、春といふにかゝる枕詞ぢやが　今此歌では、やがて木草の芽ごもつてあるといふ一つの名詞にしていうたものぢや、○今は冬枯の時節で木の芽は内にこもつてをる事故　花などいふ事は、もとより思ひもかけないでをる事ぢやのを　あれあの木の間からして、丁度花とみえるまでに雪がサ、ふつてくる事ぢやわい、

やまとのくにゝまかれりける時に、雪のふりけるをみてよめる

坂上これのり

朝ぼらけ有明の月とみるまでによしの〻里にふれるしらゆき

「まかれりける時」はその地にある程の事をいふのぢや。

「朝ぼらけ」の「ほらけ」は朗明の約ぢやと云うて、夜がしらしらと明ける時刻の事を朝ぼらけと云ふ　「有明の月」は月の影はまださしながら、夜のあけるを云ふ、○夜がしら〳〵と明けてゆく折から、丁度有明の月の影がしら〳〵と殘つてをるかとみるほどに　此吉野の里には雪がふつた事よ」といふので　アヽ面白い景ぢや京ではとてもみられない、といふが言外。

題しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみゆきまれにこそみめ

（アヽ面白い景色ぢや、どうもあかない景色ぢや、）どうか消えない内に又引つゞいてふるやうにせよ　春の來て霞が空に立つやうになれば、雪はまれになつてサ、度々見ると云ふ事は出來まいから、といふので　「けぬがうへに又もふりしけ」といふ語勢に　あゝおもしろい景色やといふ意が、おのづからこもつて聞えるぢや。

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば

此歌はある人のいはく、かきの本の人まろがうたなり、

「あまぎる」　天霧るで、天がかきくもると云ふ事、あまぎる雪は雪のさかんにふ

るを云ふのぢや、○折角と咲き始めた梅の花も、どれが花ぢややら花でないやら、とんと差別が見えぬ　はてあのやうに天がかきくもるまで、雪が一般にふる事であるからしてサ、」

梅の花に雪のふれるをよめる、　小野のたかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだに〻ほへ人の知るべく

梅の花の色は、白いものぢやに依つて、雪と一しよになつて、どれが花やらとんと見わけられずはあるとても　せめては其香氣ばかりをでも匂はかしてくれよ　人があれが梅の花ぢやと知るやうに、」といふので　「かをだに匂へ」と「かにだに匂へ」とは差別がある　これは香を主として云ふゆゑを云ふので「人をわかる」と「人に別る」との別と同じぢや　委しくは皇國文法釋義に云うておいた、さて此歌花とばかりあるから「梅の花に云々」の詞書はあるのぢや、

雪のうちの梅の花をよめる、　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせば誰かことゞわきてをらまし

梅の花の色は、雪と同一に白い事であるが　もしもそのかをりまでが、雪にまがひ混ずると云ふやうな事が有つたならば　誰とてか花は花　雪は雪　とそれ〳〵差別して折取る事ができやうぞや　決して出來はせまい、」といふので香が混同せぬからして、折る事もできるといふのぢや、

雪のふりけるをみてよめる、　紀の友のり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける何れを梅とわきてをらまし

雪がふれば、どの木も、どの木も　皆總體に花がサ、咲いたやうに見えるわいぢやからして、どれを梅の花ぢやと差別して、折つたものであらう」といふでどうも一向に目當がつかぬが言外

物へまかりける人をまちて、しはすのつごもりによめる　みつね

他所へ往つた人の歸るを待つうちに、歳末となつたである、つごもりは月末の事ぢや、

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はたとづれもせず

かれは離るゝ事といふはすでに申した通りぢや、〇わしが待ちもせぬ年は、すでに極、程近くきたけれども　此都を立ちいでゝ冬の草のやうに、かれて即ち離れ去つて往つた人は　まちにまちかねてをれども、とんと音信不通ぢや、といふで　どうした事であらう、が言外

としのはてによめる、　在原のもとかた

あら玉の年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつつ

「あらたまの」は枕詞「ふりまさり」は雪の降り増ると、年の舊り増るとをかねて云うたのぢや　偖此年に云ふふると云ふ詞を初學は經ると混同する事があるが　經るはへ、ふ、ふる、ふれと下二段に又舊るはふりふるふるゝふるれと上二段に活くものでで　判然區別がある　これは序に申す事ぢや、〇年々歳々、歳末になるたびごとに　雪も段々と降りまし　又我等が身も追々と舊るけまして　つひに老人となつてしまふ事ぢや　さて〳〵つまらぬ事ぢや、といふで「ふりまさりつゝ」とつゝでとめた餘情に、さて〳〵なげかはしいといふ意がふくまれるぢや

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、　よみ人しらず

雪降りて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

この歌は、歳寒然後知松柏之後彫と云ふ意を思つてよんだものである、〇雪が降りつもつて年もいよ〳〵歳末となつてしまうたといふ今日に至つてこそは　どうしても、かうしても、變じかはらぬといふ松の色は、全くあらはれ知られる事であるわいと云ふので「もみぢぬ」は變色せぬ事　さて「つひにもみぢぬ」と云ふ語勢に、露や時雨やにも色が變らなかつたが、つひに、と云ふほどの意が自然としられる事で　こゝが面白いところぢや、

としのはてによめる、　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

昨日といひてくらし　今日といひてくらし　又あすといひてくらすといふべきを　飛鳥川にいひかけ　さて川といふから流れて早い月日であるわい」と光陰のわけもなく過ぎ行く事を歎じたるので、「昨日といひけふとくらしてあすか川とさら〳〵とよみくだした語勢に　おのづから月日のわけもなく經過するさまをしらせ　之をうけて流れて云々と歎息したかけ合せ風調まことに感の深い事である、

歌たてまつれとたほせられし時に、よみて奉れる、

紀のつらゆき

行年のをしくもある哉ます鏡みるかげさへにくれぬと思へば

五の句は、年の老ゆる事をくるると云ふから　年の暮るゝにかけて云うたのぢや　朝臣の歌に「人の齢はくれずぞありける」「蓬のねもくれぬべらなり」などあるくるると云ふ詞皆老ゆる事を云うたのぢや　○くれてゆく年がさてさてをしい事である事かなア　鏡に向うて見る我が姿の影までさへ　このやうに老てゆく事ぢやから、と云ふので　「思へば」は、前の「人めも草もかれぬと思へば」と同じく　「くれぬれば」といふほどの詞で　年のくれるにかけていうたのぢや、

古今集詳解冬卷之六　終

古今和歌集卷第七

賀歌

賀は字音のまゝ賀の歌とよむ　離別　羇旅みな字音ぢや　之を訓でよめば、賀は、ことほぎ」とも「ほぎ」ともいふ　偖こゝにいふ賀は、俗に賀の祝といふ賀と同じく、祝壽の意で　官位の昇進を祝する類は、雜の部に修めてある　但し末の一首丈は皇子の御誕生を祝するものであるが　玄かしこれも要するに祝壽の外でないから、此中に入れられたのぢやと古人の說ぢや　又此うちには、賀の時の屏風の繪につきてよんだ歌をも入られたから　歌の表には賀の意のないものもあるのぢや、

題しらず　よみ人しらず

我君は千世に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

此歌の二句、顯昭本　六帖　新撰和歌集　奥義抄　道濟十體等にはちよにま

しませ」とあるが　然るときは歌の意も自らちがふことゝなる　そのことは後にいひ升　「さゞれ」は「さゞら」といふと同じで、小くさゝやかなることで　さゝら川　さゝらなみ　さゞらみづ　さゞれ川　さゞれ水の類ぢや　「いはほ」は大磐石を云ふ　「むす」は生じはへる事ぢや　扨又「ちよにやちよに」は、唯數限りもない事を云ふ詞で　必ず千年八千年と云ふ數に係はりて見るべきではない　一首の意は○我君の御壽命はちよにやちよと申すやうに　數限もなく　あの小砂利のさゞれ石が次第々々に成長して、終に大磐石となつて、苔の青々と生ずるに至る迄、御繁昌にましませかし、といふので　「苔のむすまで」の下に「ましませ」といふ詞をふくめて、とゞめたのぢや　又二の句「ちよにましませ」の方でとけば　「我君の御壽はちよと云ふやうに、數限りなくましませかし」　たとへばかの小砂利が、大磐石となつて、苔が生ずる迄に」と　ましませに打かへしてみる事となるのぢや　偖又此歌を、今の世の唱歌では　「君が代はちよにやちよに」とうたふ事であるが　これは公任卿が朗詠集に、かく改めて載せられたに依るもので　君が代と云ふときは、聖壽の事よりは、むしろ御治世の事をいふことゝなるである、

わたつ海の濱のまさごをかぞへつゝ君が千年のありかずにせむ

「わたつみ」は「渡つ海」で、たつ共に潤てよむことは、已にいうておいた　わたつみの濱は、海濱と云ふほどの事　「まさご」は、いさごと云ふに同じで、小砂利の事　「あり數」のありは　有通ひ　有立しなどいふありと同じく、輕くそへていふまでゝ、數といふことぢや、○海濱にある小砂利は、實に數限りもない事なるが　その小砂利を數へつ數へつして、わが君の際限なき御壽命の數とする事とせやう、といふので　聖壽は實に際限なき事故、數へ盡されぬ小砂利の數をもて數へん事　まことに相應の事であらうから、といふを言外にきかせたのぢや、

12

右ほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千世とぞなく

三の句顯昭本「なくちどり」とあるが宜しい　「すむちどり」は、結句「やちよとぞな

く」とありて　鳴くの詞重なるによりて、後人の改めたであらう、と先哲の説ちや「なくちどり」は、大體を云ひ「やちよとぞなく」は、その聲を云ふ　四の句六帖に「よはひを」とあり　此賀の歌は　主として年賀の歌をあげたること、前に云ふ如くなれば「よはひを」の方が宜しく思はれる　さほの山は能登ぢやさて鹽はさしくるものぢやから、さしでのいそとうけたぢや　さしでの磯とは、海中へ突出でたる磯崎を云ふ　ちどりの聲はちえ〳〵ともちよちよともきこえるものぢやから、やちよとなくと云ふぢや、○鹽の山の麓から、さしいでたる磯ざきに、鳴く千鳥の聲をきけば　我君の御壽命を、やちよ即ち數限りなくとことほぎ祝ひてサ、なく事である　ア、千鳥までがサ」　此歌サラ〳〵として何のかはりたる趣向もないが、一首のさま丈高くしていかにも優美に聞えるこゝが妙なところぢや、

わがよはひ君がやちよにとりそへてとゞめおきてば思ひ出にせよ

此歌のやちよは　前の歌どものとは異なつて、八千歳といふことぢや　さて結句普通本には　せよとあれど、顯昭本にせんとあるが宜しい「とゞめおきてば」は　とゞめおきたらばといふ意　すべて此てばといふ辭は、たらばといふ意で、たればといふではない　といふことは、春上三七「梅がゝを袖にうつしてとゞめてば」の歌の處で申した通りであるが　去かし此歌の結句せよとある本による時は　てばをたればの意と見ても解せられるから　左樣の解釋もあるが　たればのばにつゞくには、此詞では是非ともうればと言はねばならぬ事ぢや　故にてばといふ辭は　いかなる場合に用ひられたものでも、すべてたらばといふ意の外はないので　一口にいへばたればといふ意をてばといふ事は、一切ないのである「とゞめ」は、梅がゝを袖にうつしてとゞめてば」の歌の「とゞめ」と同じ意で　この歌では、今日の年齡を今日のまゝで留めおくといふ事ぢや、○我等が年齡を、君が保たせ玉ふ八千歳の御壽命に　もしも取添へて一緒のものとし　今日のまゝでさながら留めておく事であらうならば、いつまでも今日の事が思ひ出し草になる事ならん　どうぞさやうに去たいものぢや、といふので　君が齡は已に八千歳のものと決定し　さて自身

の齢をもそれに附隨して云々といひなしたのが面白いである　此歌古來の解釋は皆明かでないのみならず、友だちに對していうたものとみたなどすべて宜しくない　最初の我君はの歌よりはじめて、四首いづれも君上の御齢の事をいうたものである　といふ事は次に臣下の賀につきての御製をあげたるにても明かにさられるのぢや、

仁和御時僧正遍昭に、七十の賀給ひける時の御歌、

即ち光孝天皇の御製ぢや　七十の賀を賜はりたる事は仁和元年十二月十八日のことで、その由は三代實錄にみえてをる事ぢや、

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな

この御製のやちよも數の八千歳をの玉へるのぢや　ながらへは長ら歴で存命と云ふこと、○斯樣にして居つゝどうかかうかして存命して居て　君がゆく〳〵經歴すべき八千年の末の有樣をも、親しく見るやうにしたいことである、といふので　これも僧正の壽命を八千歳と御定めありて、よませられたところが面白いのぢや、

仁和のみかどの、みこにおはしける時に、御をばの八十の賀に、ちろかねを杖につくれりけるを見て、かの御をばにかはりてよめる、

僧正遍昭

天皇の御母は贈皇大后藤原澤子と申して　贈太政大臣諸繼公の御女ぢや御をばとは、其御姉妹のうちを申すのであらう、

ちはやぶる神のきりけむつくからに千年の坂もこえぬべらなり

二の句六帖　顯昭本　遍昭集等には「神やきりけん」とある、それが宜しい、と先哲も申された　さて此歌には杖といふ事もなく　又た白銀にて作つたものとの事も　詞の表にはあらはれぬから、詞書をくはしくそへられたのぢや

ちはやぶるは、神といふにかゝる枕詞ぢやが　この枕詞をおいて調をのどめたところから　何となく其杖のいかにもうるはしくて、人間の造り出したものともおもはれぬといふやうなる意味が、おのづからこもりて聞ゆるのでかねてもいふ通りこゝが枕詞の妙處であるぢや、○右の如く神の手に造られたりげのものであるから　之を杖ついてゆく事ならば、千年の長き阪をも、いとやす〳〵と越え得らるべくおもはるる事よ、といふのぢや、

⊠ほり川のおほいまうちぎみの、四十賀九條の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

太政大臣基經公の事ぢや、

櫻花ちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まがふがに

老らくを、おいらくとよむは誤で、これは老ゆるのを延べてらくといふもの　悔ゆらく　恨むらくの、らくと同じぢや　已に萬葉にも於由良久とある、と正義にみえたは從ふべき說である　さて此延言の「おゆらく」をのとうけて體言狀とし、老といふものゝといふ事に用ひたのぢや　四十を初老といふから、老といふものゝ來ん道といひなしたのぢや　「道まがふがに」は離別に「山風に櫻吹まき亂れなん花のまぎれに立止るべく」とあるまぎれと同じく　花の盛にちる時は目がちら〳〵して道もわからなくなるをいふので　がにはデモアラウカラニといふ意の辭　委しくは皇國文法釋義にいうてある　此まがふの詞　顯昭本にはまどふとある　どちらでも大意は違はないが、前にいうた花のまぎれといふ詞もあるから、普通本のまゝでも聞える事ぢや、○櫻花が散り亂れて前後左右もわからぬ程にまつ暗になれかし　さらば今からして老といふ者が襲ひ來んとする道が、まぎらはしく、わからなくなるでもあらうからにサ、といふぢや　此基經公の九條邸の庭園には、櫻が多く有た事とみえる、

さだときのみこのをばの、よそぢの賀を大井にてしける日よめる、

きのこれをか

大井は嵯峨の大井河の事ぢや、

かめのをの山のいはねをとめて落つる瀧のあら玉ちよの數かも

龜の尾の山は、龜山とも、龜の尾山ともいふ　大井河は其麓を流るゝのぢやとめては尋求むる意の詞ぢやが、こゝでは極輕く用ひて、岩根を傳ふ事にいうたのぢや　ちよは例の數限りなき意、○あの龜山の岩根を傳ひて落ちくる瀧は、千萬無量に碎け散る事であるが　それは此をば君の御壽命の數限りのない數をあらはすものであらうか、といふので　龜には萬年といへば、龜のをの山といふうち萬年の意も何となくこもりて聞ゆるが面白いぢや、

さだやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風に、櫻の花のちるあたに、人の花見たるかたかけるをよめる、

藤原興風

真保のみこのきさいの宮は、真保親王の御母の后の宮といふことで　東宮の女御といふと同じ書き方ぢや　かたとは繪といふ事である、

いたづらに過る月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき、

「いたづら」とはむだにむなしいといふこと　○むさとむだに過ぎてゆく月日をば　別に何とも思はないで　唯此花を見てくらす春の日數のみがサ、甚少ないやうに思はれるよ、といふので　あゝおろかな事よ、といふが言外ぢや此歌は繪のさまに依て讀んだまでゝ、別に賀の意はない　又年賀には屏風を新調すること此時代の風習である　さて又此歌の三句を朗詠には「多けれど」と改めてのせられたが　これは五句のすくなきとあるに對しての事ではあるが　それでは頓と味ひのないものとなる事は、古人も已にいひおかれた、

もとやすのみこの、七十の賀のうしろの屏風によみてかきける、

きのつらゆき

うしろの屏風とは、賀宴を開かるゝ時、其席のうしろに建てる屏風といふ事ぢや、

春くればやどにまづさく梅の花君が千年のかざしとぞみる

挿頭とは、草木の折枝を冠の巾子のところにさすことぢや、○春が來ると此御庭園に先第一番に咲出る梅の花は　君が榮え玉ふべき、數限りなき春毎に挿頭となるものと見る事である、」といふので　此賀の宴を開かれる折しも、庭前の梅が咲初めたを、やがてかやうによみなしたものであらう　或説にこれは屏風の繪に梅が書いてありしによりて　書がきし梅はちる事がないから、千年のかざしというでであらう、といふは、面白いやうぢやが　しかし次の歌の二首もこれと同じく、屏風の歌といふは、詞書が一つなので知られ　又書をかけるならば前にも後にもある詞書のやうに、書がける由がなくてはならぬ事ぢやに　こゝには唯「うしろの屏風によみてかきける」とばかりあるにても、書に依るものでないといふは明かな事である　又次の二首は詞書の落ちたであらうといふ説もあるが　これはあまりに入立つた説といはざるを得ない、

いにしへにありきあらずはあらねども千年のためし君に始め

素性法師

○昔において其例が有た事か、ない事かはしらぬ事なれども　とに角千年の高齢を受くといふ事の、明かなる例をば、君からして開くことゝいたさう、

ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞあるらむわが君のため

「かぞふ」は其事を念々思ひつゞけること　それを萬代といふにかけて、かぞふというたのぢや　しるらむは、遠鏡に、はからひ行ふをいふ、とある如く　我が願意を領承して、其通り行ひ玉ふならん、といふこと　わが君のためは初句の上にかへしてみるのぢや、○我が君の御爲に萬代もましませと　ふしても思ひ、おきても願ひ、晝夜念々祈りてやまざるわが志の程をば　神もサ知ろしめして諾し玉ひ、其通り幸ひ玉ふ事であらう、

藤原ノ三善が六十ノ賀によみける、　在原ノしげはる

つるかめも千年のゝちはあらなくにあかぬ心にまかせはてゝ

此歌はある人在原のときはるがともいふ、

あかぬは不足といふこと　あかぬ心は即ちあきたらぬといふ意ぢや、○鶴亀は千年の壽を保つとて長壽の例に常いふことぢやが　去かしそれも千年の後はどうある事かしらぬ事である　からしてなまじひに鶴亀などの例はあげず、只千萬年もあきたらず、際限なく榮え玉へと願ふ心に打任せておく事といたさう、」

よしみねのつねなりが、よそぢの賀に、むすめにかはりてよみ侍ける、

そせいほうし

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の蔭にすまむと思へば

餘材に、待つに松をかけ　つるの辭に鶴をかけ　さてすむは鶴によせて娘みづからの事をいふ　是は此賀の時、松に鶴の居た形を作りて、祝へるに合せてよんだもの、というてあるが、此說が宜しい　一說に之をうつて、さやう見ては俳諧となるといふは、却てわろい　もし鶴にいひかけねば、此調では是非いはぬなる」と現在からいはなくてはならぬ　然るに「いはひつる」と小過去からいうたので、鶴をかけた事は明かである　さて又松は千年といふから、其上の數によりて萬世を待つと言ひかけたので○松は千年と申すが、千年のみならず、萬年をまつといふに寄せてサ、父君をば祝ひつる事である　それは其千年の蔭を賴みて、永く住居せうと思ふからであります、といふので　かげにすむといふ詞のうちに、おのづから其蔭をたのみ、ちからとして世をおくらんとする意がふくまれて聞ゆるところが妙なである、

ないしのかみの、右大將藤原朝臣の四十賀しける時に、四季のゑかけるうしろの屏風に、書たりけるうた、

以下七首の歌のうち、初の一首は素性で　第二首以下はよみ人は別人ぢや　此七首を素性にかゝしめられたので、作者の名はしるされぬぢやと古人の說である、

春日野にわかなつみつゝ萬代をいはふこゝろは神ぞゑるらむ

屏風の畫、若菜をつむさまをかいたものぢやらう「いはふ」は祝ひ願ふこと「去る」は前にいうたと同じ意ぢや　"猪正月七日若菜を摘む事"、もと支那の風よりおこつた事なれど　老人の若かへるといふによせ、つひには賀宴にも若菜を祝ふことゝなつたは、物語ものにもみえてをる事ぢや、○今日の御賀のために春日野に出でゝ　若菜を摘み〳〵、年々若かへり玉ひて万年も御繁昌あれと祝ひ祈る我等が心をば　神もサ御領受あつて、幸福を下される事であらう　偖此歌の前に春といふ字を寫しおとしたであらう　次に夏秋冬とある

に依れば、と古人申された、

山高み雲ゐに見ゆるさくら花こゝろのゆきてをらぬ日ぞなき

これは山に櫻の花の咲いた畫ぢや「山高み」は山が高くてといふ事　すべて此みといふはくてといふ事ぢや　風寒み　瀬を早みは　風が寒くて瀬が早くてぢや　委しくは皇國文法釋義にいうてある「くもゐ」は雲の居るところ即ち空の事で、高い事にも遠い事にもいふ、○山が高くて雲の居る空に遙に見渡されるあの櫻の花よ　あゝいかにもうつくしい事ぢや、からして毎日々々打ながめて、心が行て折らぬといふ日はない、といふで　登る事が出來ないから、といふが餘情　これに畫にかいたものである故にといふ意がおのづからこもるところが妙なである　此歌は六帖家集等にみえて、作者は躬恒ぢや、

夏

めづらしき聲ならなくにほとゝぎすこゝらの年をあかずも有哉

これは時鳥の繪ぢや　「こゝらの年」は、多くの年頃といふ意ぢや、○年々歳々來て鳴く鳥で、別に珍しい聲といふでもないのに　時鳥といふ鳥は、多くの年頃をいつきゝてもマアどうもあくといふ事がないなア」　此歌は友則である、

秋

すみのえの松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつ白波

これは松風がはげしく吹いて、浪がたつたさまの畫とみえる　住の江は攝津の住吉の浦の事　「おきつしら波」は、おきつ波といふと同じく、沖の波といふ事

で　磯際の波を邊つ波　又は邊波といふに對するものぢや　去かし又沖から打よせてくる荒波の事にもいふ　人丸朝臣の歌に沖つ波來よるありそをとよまれ　又此歌にいふものなどは、沖から打よせくる荒波の事で　即ち磯うつ荒波ぢや　住吉は岸うつ波が荒く高いところぢや、○住吉の岸通りに並立てをる松を秋風が颯々と吹くからして　忽ちそれに聲をうち添へて、沖からよせくる荒波が蓼々と聞える事よ、といふので　うちそふるは、うち見る　うち聞くなどいふ　そへていふ　うちに岸をうつ意をかけていふので、何の巧もなく　ぢらとよみたした歌ぢやが　風調語勢いかにも強く一吟上たぢに風の音、波の響をきくやうに思はれる　こゝが調の妙處である　是は躬恒の作ぢや　偖或説は此歌の沖つ白波といふを、沖の波の事として　住吉は岸うつ波の音の高い處ぢやから、沖の波の音をきくべきでない　實景に合はない歌ぢや、といふは、沖津波は沖からよせくる荒波をもいふといふ事を知らぬからの論で　沖つしら波という、岸をうつ波の音の高いをしらせた處が妙なである　尚此沖つ波、沖つ白波の事は、別に語例をあげて委しくいうてある。

千鳥なくさほの川霧たちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

是は山に紅葉の繪あるによりて、佐保山にとりなしたぢや　木の葉は露霜時雨は勿論、霧にも色の變ずるものである、○千鳥が鳴く佐保川はモウ霧が立た事らしい　ハテあの佐保山の木の葉が、もはや段々と色がうつくしくそめかけてゆく事ぢやからサ」　此作者は忠岑である。

秋くれど色もかはらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

是は青山を書いて紅葉を風のさそふさまをゑがいた畫とみえる、○秋が來ても別に木の葉が色づくといふ事もない、あの常盤木ばかり立つてをる山にはよそからして紅葉を風がサ、はこんできてかせつけて秋といふことをしらする事であるよといふので　風ぞかしけるといふ言外に秋を知らすといふ意がおのづとしられるぢや　これも上の歌と同じく忠岑ぢやらうと古來の説ぢや、

冬

しら雪のふりしく時はみよしの〻山下風に花ぞちりける

是は雲中の景色で山にも白く雪の積つたさまをかいたものとみえる、○白雪が降かしきる時には、みよしの〻山から吹おろす風に、麓の方は花がサッちり亂れる事である」吉野山は花にも雪にも名高い名所ぢやからいうたぢや　此歌は貫之ぢや、

春宮のうまれ給へりける時にまゐりてよめる、　典侍藤原よるかの朝臣

春宮は延喜第二の御子保明の御子で　御母は基經公の女中宮藤原穩子と申したぢや、

峰高き春日の山にいづる日はくもる時なくてらすべらなり

藤原氏の氏神は、春日神社ぢやから　中宮の御事を峰高き春日の山と申す　その御腹より御生れなされた皇子ぢやから出づる日と申すのぢや　「くもる時なくてらすは日の事をうけていふ、春日山の事ではない、○峰の最も高い春日の山からして、さし出でたる日影は少しでもくもるといふ事はなく　明かに世上を照らすべきさまである、」といふので　此皇太子は行く〻天下を照覽ましますの御事ならん、との事をふくめて申したのである、

古今集詳解賀卷之七終

古今和歌集卷第八

離別歌

題しらず　　在原行平朝臣

立わかれいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこむ

齋衡二年正月、在原行平因幡守となる由、文德實錄に見えてをる　此時京の人へによみておくつたものぢやらう、と古人の說ぢや　いなばの山は廣く因幡の國の山といふこと　それを立別れて去なばと言ひかけ、又山には松の生ずるものぢやから、峰に生ふる松というて待つにかけたのぢや　「今」は俗にスグチキニといふ意　「今こむといひしばかりに長月のなどいふ「今」と同じぢや、○今我等は京を出立し、お別れ申して因幡の國へ往き去る事であるが　其因幡の山の峰には、松が生へて居るといふが　其松の詞のやうに、我等を待つとうけ玉はる事ならば、すぐちきに歸り來て、お目にかゝるであらう、といふで　ぢや

からさやうに別ををしまるゝに及ばぬが言外、

よみ人しらず

すがるなく秋の萩はら朝たちて旅ゆく人をいつとかまたむ

すがるは螺贏と書いて、一名を佐曾里ともいふ虫の名で、似我蜂の事　「すがる鳴く」は　即ち其人に別るゝ朝の野べの有様を形容していふのぢや、○すがるが、こゝかしこに群れ飛で鳴く　秋萩の花咲く野原をかき分け、今朝出立して旅路に赴かるゝ事ぢやが　歸らるゝ時をば、何時と慥かに定めては待つべきぞ、」といふので　まことにいつとも定めがたく、名殘をしい事であるが言外ぢや　すがるなく云々、と見る所を其まゝのべたものぢやが、何となく野べのけしきがうらがなしいやうに聞える所が、調の妙な處である、

かぎりなき雲井のよそにわかるとも人を心におくらむさむやは

是は我が旅立つ時、別れを惜む人に對してよんだもので　正義に思ふ人などに對するものならんとあるが、或はさやうであらう　「おくらさんやは」は後れしめずといふ事で　形こそ相別るれ、心は絶えず相伴うて、少しも後におくれしむることあるべからずといふ意ぢや、○我身は際限もなく遠き天外の旅路に出立ちて、君と別るる事ではあるが　去かし心の内には、絶えず君を思ひ、君と伴うて鳥渡の間も君をおくれしむるやうの事はないことである、

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時に、はゝのよめる、

みちのくは陸奥すけは佐で、此時代の地方官は、守、佐、掾、目の四階があつたことぢや　「まかりける時に」とは、行かんとする時に、といふ事で　未然の事をかやうに書くは、此時代の一種の書ぶりぢや、以下も皆同じである、

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

たらちねは、親といふにかゝる枕詞　これも此枕詞で詞をのどめたうちに、おのづと子のためをさまゞと思ふやうな心が匂ふのぢや　「せきなとゞめそ」

はさへぎりといむるな、といふに關をかけていうたである、○親の身が附添ひて行く事ができぬから せめては其守護にと差添へてやる心丈をば、何方にてもさへぎり止むるやうの事はして下さるなといふので 年若い子が遠方の地に旅行するを、覺束なく氣遣ひたる親の情があはれぢや、と正義にいうてあるはさる事ぢや、

さだときのみこの家にて、ふぢはらのきよふが、近江のすけにまかりける時に、うまのはなむけしけるよ、よめる、

きのとしさだ

「うまのはなむけ」は送別會の事ぢや、

けふわかれあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

近江は京より程近き地ぢやから 今日別れても、逢ひたいと思へば、明日すぐ逢ふ事が出來るといふに、近江の國名をよみ入れたのぢや 露けきは玄めりがちに覺ゆること 涙ぐましく心の引たゝぬにかりていうたぢや、○今日別れても、明日逢ふことの出來る場所であると思ふけれど、夜がふけて、露が下る故かしらんが、袖が何となく玄めりがちに覺える事よ、といふので 「思へども」とかゝり「袖の露けき」とうけたかけ合せで 悲しむべきでなく隨て涙ぐましい筈もないのにといふ意がおのづと玄られる處が妙である、

こしへまかりける人に、よみてつかはしける、

かへる山ありとはきけど春霞たちわかれなば戀しかるべし

「こし」は、三越の總稱 「かへる山」は越前敦賀郡にある山の名 「春霞」は此時春と覺しく、時節のものを以て、たちとかゝる枕詞のやうにおいたのぢやが この うちに何となくはるかなざまがひゝき、且初句のかへる山とあるに應じて面白いぢや、○彼地にはかへる山といふがあるとうけ玉はるが、其名の如く君もいづれ其内には御歸りになる事は勿論ぢやけれど さしあたり、遠い場所へ立別れた事ならば、さぞ戀しくなつかしく思ふ事であらう、

人のうまのはなむけにてよめる、

をしむから戀しきものを白雲のたちなむ後は何ごゝちせむ

「白雲の」はたちといふにかゝる枕詞で、これもおのづとそのうちに道の程のはるかなやうの意がこもる、○別を惜む今日からして、はや已に戀しくおもふ事なるのに　いよ〳〵別れてはるかなる旅路に立てゆかれたことならば、どのやうな氣もちがするであらう、といふので　あゝ今日から思ひやられるといふが言外、

ともだちの、人の國へまかりけるによめる、

在原しげはる

人の國は、もとは外國をさしていうたが　後には自分が住居する國の外　即ち他國といふ事にいふ事となつたのぢや、

わかれてはほどをへだつと思へばやかつみながらにかねて戀しき

一旦立別れての上は、遠き路程を隔つる事となるを思ふ故にや　一方にはかやうに逢ひ見ながらに、前以て戀しくなつかしく思はるゝ事よ」といふので　かつは前にいうた通り、一方にはといふ事ぢや、

あづまのかたへまかりける人に、よみてつかはしける、

いかこのあつゆき

あづまは、相阪の關より東の方をいふ名で、阪東といふと同じぢや、

思へども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

一緒について往きたいと思ふけれども、此身をサ二つに分けるといふ事は出來ないから　ハテ目に見えないものぢやから、君は知るまいが、心を君に付き添へてやる事である」身をしのしはつよめの辭「たぐへ」は附添へることぢや、

相坂にて、人をわかれける時によめる、

なにはのよろづを

人を別るは、我留りて旅行する人を送る事　人に別るは、我れ旅行して人に別るゝ事　くはしくは皇國文法釋義にいうてある、

あふ坂の關しまさしき物ならばあかず別るゝ君をとゞめよ

「まさしき」は名稱通りちがひないといふこと　「あかず」は遠鏡に殘り多いと譯した意ぢや、○關といふものは、人をとゞめて通さぬものぢやが　逢阪の關も其關といふ名稱通り、ちがひのないものである事ならば　今かく名殘り多いのに、旅だちして別れゆく君を、そこでとゞめて通さぬやうにしてくれよ、といふで　あふ阪といふに別に逢ふといふ意味をかけたでないと故人の說ぢや、

題しらず　よみ人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべきものを

この歌は、ある人つかさを給はりて、あたらしきめにつきて、としへてすみける人をすてゝ、たゞあすたつとばかり云へりける時に、ともかうもいはで、よみてつかはしけろ、

此歌をとくには、先此左注の事をいはねばならぬ　此左注は後の人の書加へたのぢやといふと　貫之朝臣が正しく書いたものぢやといふ二說あるが按ふに文體に依つても、朝臣が書かれたに相違ないのみならず　實はよみ人も、又左注にいふある人といふも、慥にわかつて居る事なれど　其事がらがあまりに不都合であるから、端には只何となく題しらず、よみ人しらず、と記して偖其事實を左注にあげたので　要するに何分か筆誅の意よりするものと考へられる　故に大略此注の事をお話し申さう　つかさを給はりてとは、官に任じた事で、これは地方官になつたのぢや　地方官になつたから地方に赴任するに臨んで、新規の妻を迎へて、從來そひ來つた妻をばおきさりに捨置きて、只明日出立する由ばかりをいうてやつた時　其妻がよんだといふので、これが此注の大意ぢや　偖歌の「からころも」といひ　「朝露の」といふは共に枕詞ぢやが　「朝露の」は其出立の朝の實況のものを枕として、さて其緣語から消ぬべきものをというたぢや、○明日たつといふ使の詞に對して、あゝ今さらに出立する日はきゝますまい　むごくつれなくわたしをば捨ておきてサ、ゆく事な

れば、唯さへも消えうせぬべく歎きをる事なるのに」といふので　たつ日をきかば忽ち消え入るべしといふが言外ぢや　消ぬべきは消えぬべきで、死ぬること、露の縁語で消ぬといふ　さて此「ゆけば」を或る説に「ゆかば」の誤ならんといふは、よくも思はぬ説で　「ゆかば」は、未然よりいふ詞で　此もとの妻を任國へつれてゆくか、ゆかざるか未定の時に於て、もしおいて行く事ならば、といふ事ならば「ゆかば」ぢやなれども　これは已に捨置きて出立する事と決定しての上からいふものぢやから　ゆく事なればの意で「ゆけば」といふのぢや

又「から衣」と枕詞をおいてのどめた處に、おのづと茫然とした樣子が有て、あゝ今更にといふやうな情がしられ　又「朝つゆの」といふうちに、何となく深く歎く心がこもつて聞えるので、こゝが追々いうた枕詞の妙な處である、

ひたちへまかりけるときに、ふぢはらのきみとしによみてつかはしける、

寵

○あさなけに見べき君とし頼まねば思ひたちぬるくさ枕なり

「あさなけに」は、「あさにけに」といふと同じで、日々といふこと　草枕は昔の旅では草を結んで枕としたから、旅の事を草枕といふのぢや　君としのしはつよめの辭、これに公利の名をよみ入れ、又思ひ立ちに常陸の名をこめたぢや、○毎日々々絶えず逢はれる君とはサ頼まれない、不信用の御方であるから、思ひ立つてゆく常陸の旅であり升、といふぢや　或説におもひたちぬるは、思ひ斷ちぬるの意ぢや、といふが、これはよくない　斷ちの意とすれば「思ひたちぬる」の句は上の句について君とし頼まねばおもひ斷つといふ事となるが　語調がさうは聞えない　是は猶思ひ立つ草枕とみる方がよろしい、

きのむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家にやどりて、あかつき出たつとて、まかりまうしゝければ、女のよみていだせりける、

よみ人しらず

「人の家」は即ち女の家のこと　出たつは其家を立ちいでんとすること　「まか

りまうし」は暇乞といふ事ぢや　よみていだすは侍女などをして男のもとに出したのぢや　これも東國へ行かんとする時の事は、前にいうた通りぢやがまちがへて東國にての事と思ふ者もあるから、念のためにいうておくぢや、

えぞ忘らぬ今こゝろみよ命あらば我やわするる人やとはぬと、

是は男が女の家に泊つた夜、東國へ下るならば忘れて去まふ事であらうなどいうたについて、よんで出したものと思はれる　「こゝろみよ」は六帖にこゝろみん」とあるがよいと正義にあるが、まことにそれが宜しい、○イ、エサ去りません、今追付け實地に分りませう　死んだら知らぬこと、生きて居るならば、わたしが心がはりして忘れるか　又人が心がはりして問はぬことゝなるかといふ事は、」といふで　人が心がはりするは必定ぢやが言外、

あひ去りて侍りける人の、あづまのかたへまかりけるをおくるとてよめる、

ふかやぶ

雲井にも通ふこゝろのおくれねばわかるゝと人に見ゆばかりな

相去りては多くは男女の間にいふ詞ぢやから　これも語らうた人におくるものぢやらう、と古人の說ぢや、が下の句のさまなどが、何さまさう思はれる、○天外はるかなる旅路にも、君を思ふ心は少しも後るゝ事なく、一緒に附添ひてゆく事ぢやから　只形ばかりが別るゝものと人の目にはみえるのぢや、といふので　二の句貫之自筆本　六帖等には「ふかき心の」とあるが　この方は雲井といふ雲の縁語で深きといふたので、兼盛の歌にも、秋ふかき雲井の雁の聲すなり」などもあつて、これも亦おもしろい、

友のあづまへまかりける時によめる、

よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだく旅かな

幣は神に手向けるもの　此時代には旅行するには道祖神に手向ける爲に幣を用意したもので、旅立つ人には切幣を袋に入れて贈りもしたものぢや　其

幣は細かにきりきざみ碎くものぢやから、心をくだくにいひかけたのぢや

さて又「白雲の」は白雲の如くといふと、隔つる白雲のといふとの二説であるが

次の「白雲の八重」といふと同じく、隔つる白雲のと實物からいうて　偖其線語で「立別れ」といふものとみる方であらう、○白雲の立隔つる遙かなる道の、此方と、彼方とに、立別れる名殘のをしさに　心腸を弊の如く切斷んで、悲しく思ふ今日の旅立である事かいなァ、

みちのくにへまかりける人に、よみてつかはしける、

つらゆき

あら雲の八重にかさなるをちにても思はむ人に心へだつな

「思はむ人」は思ふ人といふ事で、即ち自身の事をいふ、○白雲が幾重ともなく立隔てゝをる遠方でも、君を思ふ人即ち私に心を隔つる事は玄玉ふな、といふので　雲の八重にかさなるというて、隔つなとうけた手際がおもしろいぢや

二の句は貫之自筆本には「やへかさなれる」とある、

人をわかれける時によみける、

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしからむ

「人をわかれ」は前にいふ通り、送別ぢや、○色といふものは物に染みつくものぢやが、別といふ事は色でもありもせぬものを、何ゆゑ心に染みこんで侘しく悲しく思はれるであらう」「あらなくに」はありもせぬものをといふ程の、つよくいひすゑる詞ぢやから　おのづと何故と疑ひいぶかる心が生ずるのぢや、

あひ忘れりける人の、こしの國にまかりて、年へて京にまうできて、又かへりける時によめる、　凡河内躬恒

かへる山なにぞは有りてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

このあひしるは、友なり、女なり、歌においてはどちらにしても聞える、○越には歸る山といふ山があるが　其山は何の爲にあるか、定めて京へ歸るための名

かと思うたが、さうでなく　其山の詮は京に來ても永く止らずして、越へ歸といふ名でサ有た事ぢや」「何そはありてあるかひは」と重ねた語勢中、京へかへるためと思ふたに然らず、といふやうに咎むる意味をふくむところが妙なである　これらは躬恒の歌の中でも殊にすぐれたもので、且古歌の中でも數の少いものである　偖又此二の句貫之自筆本には「なそはありての」とあるが、其方が一層詞もうるはしく、趣意も圓滑に聞える事ぢや、

こしの國へまかりける人に、よみてつかはしける、

よそにのみこひやわたらむ白山のゆき見るべくもあらぬ我身は

白山は加賀國ぢやが、昔は之をこしのしら山というたぢや　此山は雪を專にいふ山故、雪にかけて、行き見るというたものぢや、○今かく別れて後は唯空しくよそにばかり、平常こひつゝ居ることであらう　かしこの白山の雪といふゆきて面會するといふ事も叶はぬ私であるからサ、といふので　さてさて名殘惜しい事よが言外、

おとは山のほとりにて、人をわかるとてよめる、

つらゆき

おとは山こだかく鳴てほとゝぎす君が別れを惜むべらなり

「こだかく」は、木の梢高くで、それに聲の高いをかけていふ　人を送りて別れんとする折しも時鳥がないたについてよんだものぢや　○音羽山に生へてを る梢に高く鳴きて、時鳥さへ、君に今日別るゝことを惜しむ樣子である、といふので我等が別を惜むばかりでなくが言外、

ふぢはらのゝちかげが、から物のつかひに、なが月のつごもりがたに、まかりけるに、うへのをのこども、さけたうびけるついでによめる、

ふぢはらのかねもち

からものゝ使とは、唐又は渤海國等の商船が筑紫に着いた時、舶載した貨物を檢査せんために、遣はされるものをいふのぢや　「まかりけるに」はまからんと

する時といふ意なるは、前にいうた　つごもり　たは月末の事ぢや、

もろともに鳴きてとゞめよきり〴〵す秋の別れは惜くやはあらぬ

これは此夜、折しもきり〴〵すの鳴く聲をきいてよんだもので、○然なり〴〵われらと共に鳴いて引止めるやうにせよ　きり〴〵すよ　あゝ今日の此秋の別は惜しくはないか、まことに惜しい事であるから」といふので　九月の月末で秋が暮れてゆく時ぢやから、秋のわかれといふて　さて此後陰の別が折しも今日にあたるから、やがてそれをこめていうたのが、おもしろいのぢや之をいたくなきて止めよ、よそにしてあるべき事か、など其他とやかくとむつかしくとくはよろしくない、

秋霧のともに立出てわかれなばはれぬ思ひにこひや渡らむ　平のもとのり

此れも前と同じ時の歌で、「秋霧のともに」は、秋霧と共にといふこと　此の事は

委しく皇國文法釋義にある、○君が秋霧と一所に立出でて旅行せられて、別れたならば、殘り留まる我等は、晴れね物思ひにかきくれて、常に君を戀ひ慕ひをることであらう」といふので　偖々名殘をしい事といふが言外　はれぬは秋霧の縁語ぢや、

源さねが、つくしへゆあみむとてまかりける時に、やまざきにてわかれをしみけるところにてよめる、　ろ　め

「ゆあみむとて」は湯治せんとてといふ事　山崎は即ち京の山崎ぢや、

いのちだに心にかなふ物ならば何か別れのかなしからまし

○人の命といふものが、心の儘になるものならば　即ちお歸京まで、必ず生きてをる事が出來ると、きめられるものならば、何として此別れが悲しからうぞ、決して悲しくはあるまい、」といふので　命のほどがわからず、これが永き別とならうもしれぬとおもふから、此別が誠に悲しくてたまらんといふが言外此しろ女といふは大江玉淵が女で、江口の遊女であるが、平常病身の人でもあ

つた事ぢやらう　女の歌として、いかにも感の深い歌ぢや、と古人もいはれた、

山ざきより神なびのもりまで、おくりに人々まかりて、かへりがてにして、わかれををしみけるによめる、

人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなむ　みなもとのさね

これは前と同じ時の歌ぢや　人やりの道とは人に遣らるゝ道といふ事で、使命などを蒙りて出立する旅のこと　これは湯治の爲に自分から出立する旅ぢやから、人やりの道ならずといふ　「大かたは」といふ詞は、今一向にといふ意ぢや、○人にやらせられる旅といふではないのに、此なくにといふ語勢の中に自身から好んでゆく旅ぢやからといふ意が自然とこもるぢや　それぢやから一向にいきともないというて、サアたちかへらうものを」といふので　玄かしどうもさうはいきかねる、といふが言外こゝが妙なである　此歌古來の解釋いづれも當らない、といふは「おほかたは」といふ詞を説き得ないからの事で　此詞は今は大概又は多分などいふ事に用ひられて居るが　古くは「大方は」「大かたの」　又は「大かたに」など　はのになど、受ける辭によりて意味が少しづゝ變ることで「おほかた」といひ　「おほかたは」といふは一向一向にといふ意に用ひられたものぢや　此集戀に「おほかたは我名も湊」　雜に「おほかたは月をもめでじ」　其外「おほかたは」とあるは、すべて一向にとしてみれは意味がよくわかるぢや　此事は例證をあげて別に委しくいうてある、

いまはこれよりかへりねと、さねがいひけるをりによよみける、

藤原かねもち

ゐたはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もゐられず

これも同時の歌ぢや、○ひたすら君が慕はれて空に心が付添うて來た　心が付添うて來たから身體も亦付いて來た事ぢやから　今歸れといはれても、か

へる方角に向うては、道もとんとわからぬ事ぢや」といふので　即ち心はどこまでも君に隨ふべければといふのが言外。

藤原これをかゞむさしのすけにまかりける時に、おくりに相坂をこゆとてよみける、　つらゆき

かつこえて別れもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそ有りけれ

あふ坂の「あふ」を逢ふといふにあやなしてよんだ歌ぢや　「かつ」は例の一方にはの意　ここでは逢ふといふに對して、一方には別るといふのぢや　「人だのめ」は正義に人頼ませで頼まれぬ事を頼ませるをいふとある通りぢや、○一方には此山を越えて別れ去る事でマアある事よ　さて〳〵逢阪といふ名は頼みにならぬ名でサある事かいな、といふので　逢といへば別れる事はあるまいと思うたものを、といふが言外ぢや、

おほえのちふるが、こしへまかりけるうまのはなむけによめる、

君がゆくこしのあら山あらねどもゆきのまにまに跡はたづねむ

藤原かねすけの朝臣

こしの白山は雪を專にいふ事は前にいうた、この歌も雪に行きをかけたぢや、○君が此度赴かれる越の白山は、我等はまだ知らぬ處ぢやけれども　其山に降る雪の跡について慕ひつついて參る事といたさう、といふに　行くまゝに跡を尋ね慕ひゆかんの意をそへたぢや　これらの歌は趣向も別にかはつた事もないが只「しら山しらねども」とさら〳〵といひ下しさてゆきのまに〳〵とうけた調からいかにもすがたがおもしろいぢや、

人の花山にまうできて、ゆふさりつかたかへりなむとあるけるときによめる、

僧正遍昭

夕ぐれのまがきは山と見えなゝむよるはこえじとやどりとるべく

花山は山科の元慶寺の事で、遍昭が住持せられた寺ぢや　籬は墻の事は勿論ぢやが、ここにいふは、籬の外に生茂りをる樹木を、すべておしこめていうたもので　元慶寺の山内に森々と生茂つてをる樹木が、墻の外にみえるを、夕暮がたに見たならば、何さま山のやうにも思はれるであらう、それをいうたぢや、○夕ぐれがたの此墻の一むらの樣は眞の山とみえるやうにあれかし　さうあらば今歸らんとする人も、夜分は越え難いとて一泊して行かれうからに」かういうたうちに、おのづと其人の歸るを深く惜む情がえられるが妙處ぢや、

山にのぼりてかへりまうできて、人々別れけるついでに、よめる、

幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに〳〵

此時代は比叡山即ち延暦寺を山といひ　三井の園城寺を寺といひ習はしたぢや　詞書にある山は、その山ぢやが、歌にいふ山は幽仙の居る寺をいふのぢや、○今諸君と別るるは至極惜しいが、是をば此寺に咲いてをる花に任せておかう　ハテ君達を留めるとも、又留めぬとも花次第にして」といふので　まさかに此花を見捨てゝはかへられまいといふが言外ぢや、

うりんゐんのみこの、舍利會に山にのぼりてかへりけるに、櫻の花の本にてよめる、

僧正へんぜう

山風にさくら吹まきみだれなむ花のまぎれに立とまるべく

○山風にて、櫻の花を吹卷いて、散り交ひ亂れるやうにあれかし、さうしたならば、其花の散り亂れるまぎれに、道を失ひて御立どまりあるべきに依て」といふので「立どまるべく」の句中おのづとこゝに御一泊を希ふ意がえられるが妙なぢや　五の句家集には「君とまるべく」とみえてをる、

ことならば君とまるべくにほはなむかへすは花のうきにやはあらぬ

幽仙法師

「ことならば」はイツソノコトニといふ意ぢやといふは、春の部(六五)にいうた

「うき」は正義に凡そよからざる限りの事は、自他輕重を問はず廣く推こめていふとある通りで　こゝでは不十分の事をうきといふぢや、○いつその事に、君が深く御賞翫なされて、御立止りなさる程咲句へかし　今御立止りもなく御かへし申すは、つまり花が不十分であるからの故ではないか、不十分だからであらう、」といふので　十分に咲句うてをる花に對してかくいふ處が、却て此花を見捨てて御歸りある事かといふ意がこもつて面白いのぢや、

仁和のみかど、みこにたはしましける時に、ふるの瀧御らんじにおはしまして、かへり給ひけるによよめる、

あかずして別るゝ涙たきにそふ水まさるとや下は見ゆらむ

兼藝法師

正義に、此時兼藝が石上の良因院などの住職であつたであらうといふは、實にさやうであらう、そこに居て御歸りの時によんだものぢや、○お名殘が盡きないでお別れ申す悲しさに、おちる涙が瀧に添うて烈しく落ちる事であるから、水かさがまさることと、下流では見える事であらう、」といふので　夥しい仰山ないひぶりが、彼の白髮三千丈の類で、至極おもしろいぢや、

かむなりのつぼにめしたりける日、おほみきなどたうべて、雨のいたうふりければ、ゆふさりまで侍りて、まかり出で侍りけるをりに、さかづきをとりて、　つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ、

これは次の返歌に依てみれば、退出せんとする時、猶其餘興が盡きぬまゝに、盃をとりながら兼覽王によみかけたものぢや　此時襲芳舍(即ち雷鳴の壺)の庭前、萩の花が盛りに咲いて居た事とみえる、○あの盛りにさいて居る秋萩の花を今日の雨にぬらすは、誠に惜しい事であるけれども、今君とお別れ申すはそれよりもまして、お名殘をしくサおもふ事であり升」といふので　故にマア一つおあがりなさいが言外ぢや　正義にこれは、此日始めて兼覽王に面會して、よまれたものならん、とあるが、返歌の趣によりても何さま左樣に思はれる、

とよめりけるかへし、

兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにける

をしむといふ詞は、もと親愛する意で、惜しといふも親愛するから出たのぢや

こゝにいふをしむも、親愛して惜しむといふ意ぢや、○さ程に我等を親愛して惜まれる人の心を、是迄一向知らずして居る間に、我身は年とりて去まうた事よ」といふを　折柄降る雨によせて秋の時雨とふるといひなしたので　若からば末遠く交はらんものを、餘齡少きが殘念ぢや、といふを餘情としたのぢや、

かねみのおほきみにはじめて物がたりして別れける時によめる、　　みつね

わかるれどうれしくもあるかこよひより逢見ぬさきに何を戀ましし

これも前と同じ時の歌である、○お別れ申すは名殘をしいが、其名殘をしいといふが却て嬉しいことであるかナア　といふは今夜より前、まだお目にかゝらぬ程は、何をなつかしう戀しうは思ひませう　何にもない事で、かくお目にかゝりて御近付に成たればこそ、名殘をしくも戀しくもおもふ事であり升れば」といふので　かやうな委曲の情を、かやうにやすらかにのべたのが妙なである　さて貫之や躬恒などに、かやうに言はれた兼覽王といふ人物は、いかやうな人で有たかと、餘材抄にいうてあるが實に左樣ぢや、

題しらず　　よみ人しらず

あかずして別るゝ袖のあら玉は君が形見とつゝみてぞゆく

これは留別、即ち送られる人の歌ぢや　別るる袖の白玉は涙の事をいうたぢや、○名殘盡きずにお別れ申す袖に、おつる涙の白玉は、君に別るゝについて出づるものぢやから　即ち君の形見として、大切に袖に包んでサ參る事である」

「つゝみてぞゆく」といふ句調に、袖をおしあてゝ泣く〳〵ゆく、といふやうな狀がしられるが妙な處ぢや、

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

「そぼち」は袂をれぬれることで、ビッショリとなるをいふ、○際限もなく別を悲しみなげく涙に、びつ袂よりぬれた袖は、いつまでもかわくといふ事はあるまい　又ふたゝび御目にかゝるまでは」といふので　常に涙にぬれつゞいて居るべきから、が言外、

かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめむ

「かきくらし」は雨の強く降るにいふ　「ことは」は「ことならば」といふ詞が約まつたもので　「ことならば」は「イッソノコトニ」といふ意ぢやといふは春下にいうておいた　「ことは」は其約まつたものぢやから、「イッソ」といふ語にあたる　「ぬれぎぬ」は、事實ない事を言ひ被せられるにいふ名詞ぢや、○大降にいつそ降るやうにあれかし、さらば此春雨を口實にかりて、雨故にといひなして、君が出立を止めるやうにせうものを」と　春雨の袂づかにふるに對していうたぢや、

袂ひてゆく人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふまでちれ

遮つて旅立する人を、おしとゞめるやうにせうものを　櫻花よ　どこが道ぢやらうと目まどひして、分らなくなるまでに、盛んにちるやうにせよかし」といふで　櫻がちりかふ處で離別するさまが、一吟の下、目にみるやうぢや、

袂がの山ごえにて、いしゐのもとにて、物いひける人の別れけるをりによめる、

つらゆき

むすぶ手の袂づくにゝごる山のゐのあかでも人に別れぬる哉

物いひける人とは、多く男女の間にいふ詞とは、前にもいうた、故にこれも女を送るならんと古人の說ぢや　詞書の「石井のもとにて物いひける」とあるは、物いひける人に石井のもとにて別るといふので、石井のもとで物いうたではない　歌の上の句は、此石井をやがて序歌としたのぢや　序歌とは三句又は四句の詞をおこさんが爲に、一二句、又は上の句に、一首の意にあづからぬ詞を述べるものをいふ、○上の句は今いふ通り石井のもとの緣から、山ゐ井の事をのべて、あかでもといふ詞をおこしたので　山の井は淺きものぢやから、泥が近く